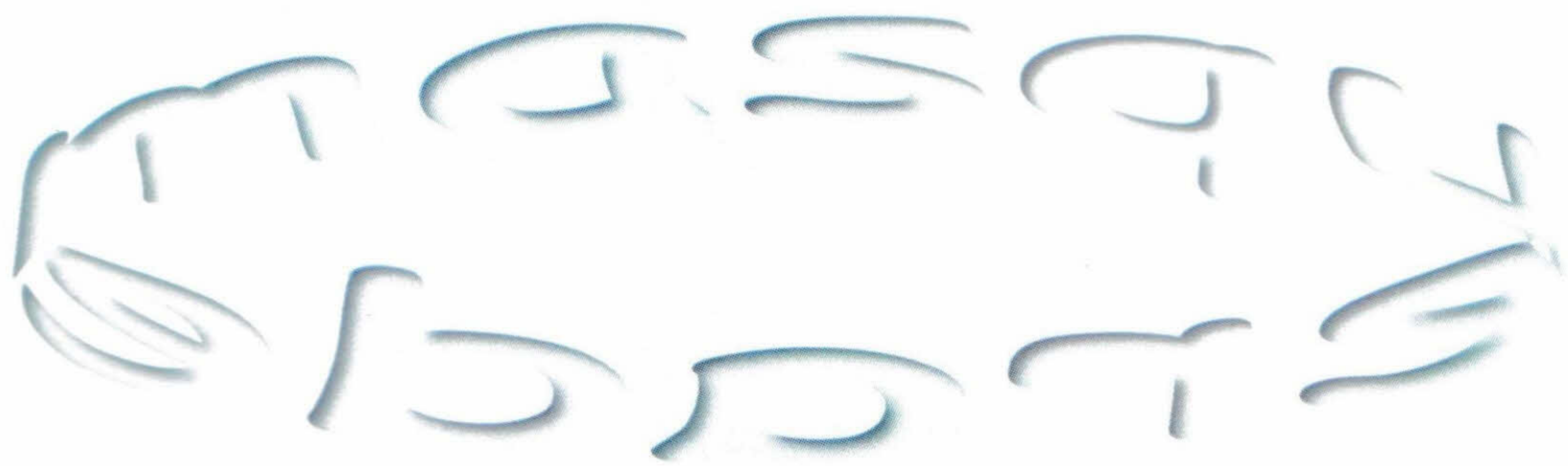




part eight

number seven edited by dr. masato mugitani

限定100部の内の12/100

メンタル・イリュージョン・キーの考察

麦谷眞里

(まえがき)「メンタル・イリュージョン・キー」というのは、三瓶米蔵さんの「みかめくらふと」が2001年に21世紀を記念して世界限定300個で売り出した手品商品です(写真201)。売価約4万円と高価だったにも関わらず、即日完売したと聞いています。私は三瓶米蔵さんとは旧知の間柄で、会ったときはいろんな話をしていましたが、この商品が売り出されたことはまったく知りませんでした。知っていたら当然にも、その時、購入していたと思います。



写真201

この300個限定の製品のあと、「みかめくらふと」は簡易バージョンを売り出しました(写真202)。そちらのほうは、21600円と限定版より安価です。キー・ホルダーが木製の板にかけられています。私は、この簡易版を持っていないのでよくわかりませんが、道具としての好みはともかく、手品の道具としては、何か仕掛けのありそうな木製のスタンドよりもキーの周りに仕掛けのないことが見える透明なアクリルのほうが優れています。

ただ、けしからんことに、この木製の簡易バージョンを300個限定のオリジナル・バージョンと偽ってオークションなどに出品している輩がいて、しかもご丁寧に、限定300個バージョンの後期版と嘘の説明をしています。300個限定販売の商品を別バージョンで造ることは考えられないので、2001年の限定バージョンはすべてアクリルのものだったと考えるのが妥当です。



写真202

この手品の現象を単純化すると、2人の観客の選んだ0～9までの二つの数字で構成される2桁の数字が、このキー・ホルダーにあらかじめ印字されている、というものです。2桁であれば、ひとりの観客が一度に2桁の数字を言ってもいいのですが、手品の構成上、二人の観客に言わせた方が演じやすいのです。演出的には、観客が泊まったホテルの部屋番号などという形式をとることになります。しかし、2桁の数字であれば、演出の形態には捉われません。

三瓶さんによれば、この手品の原案は台湾の王凱富氏と書かれています。おそらく、この手品のヒントを得たのは、David Copperfield がテレビで演じた同種の手品です。オリジナルは Jonathan Neal で、現象からしても Al Koran の「メダリオン」の優れた改案です。それが1997年、Don Wayne によって、シェラトン・ホテルのキー・ホルダーとともに「ルーム・サービス」という商品名で売り出されていますから、王凱富氏のアイデアは、それに触発されたものでしょう。

アル・コーランの「メダリオン」は、すでに masquerade でも取り上げたので、ご存じの方も多いと思われますが、アル・コーランの原案にしろ、「ルーム・サービス」にしろ、最大の欠点は、キー・ホルダーやメダルの文字が印字ではなくて手書きであることです。David Copperfield のように、マジシャンが一人で演じるのではなく、チームで行なう手品の場合には、しっかりしたバック・アップ・システムが構築されていますから、最近では、自動車のナンバープレートなども舞台裏で瞬時のうちに刻印・作製して、あたかも予言してあったかのように見せることができます。羨ましい限りです。

「みかめくらふと」の「メンタル・イリュージョン・キー」には、その「手書き」がありません。キー・ホルダーの2桁の数字は、あたかも印字してあるかのように見えるしっかりしたものです。そのまま観客に手渡すこともできます。

得失はいかなる場合にもあって、「メダリオン」も「ルーム・サービス」もポケットに入れて運ぶことができます。マジシャンが一人で演じられます。一方、「メンタル・イリュージョン・キー」は、付属のアタッシェ・ケース(プラスチック製)が付いていて、用具とアクリル板の大きさを考えると、とてもポケットに入れては運べません。ちなみに、三瓶さんはせっかくの限定版の商品を、どうして、こんな粗末な樹脂製のケースにしたのでしょうか？これこそ、得意の木製ケースにすれば価値が上がったのに、と思います。アクリル板のサイズやトータルのコストの関係かもしれません。「みかめくらふと」には、木製アタッシェ・ケースの商品(写真203)もあって、これの小売価格は52800円ですから、もし、木製ケースを付けたら売価が高くなるから逡巡されたのでしょうか。しかし、どうせ300個限定で販売するつもりだったのですから、実は限定150個にして、10万円でも良かったのです。まあ、そうしなかったのが三瓶さんのいいところだと思います。実際、ケースには仕掛けがありませんので、ただの容れ物だからどんな材質でもいいと言われれば、私には返す言葉がありません。

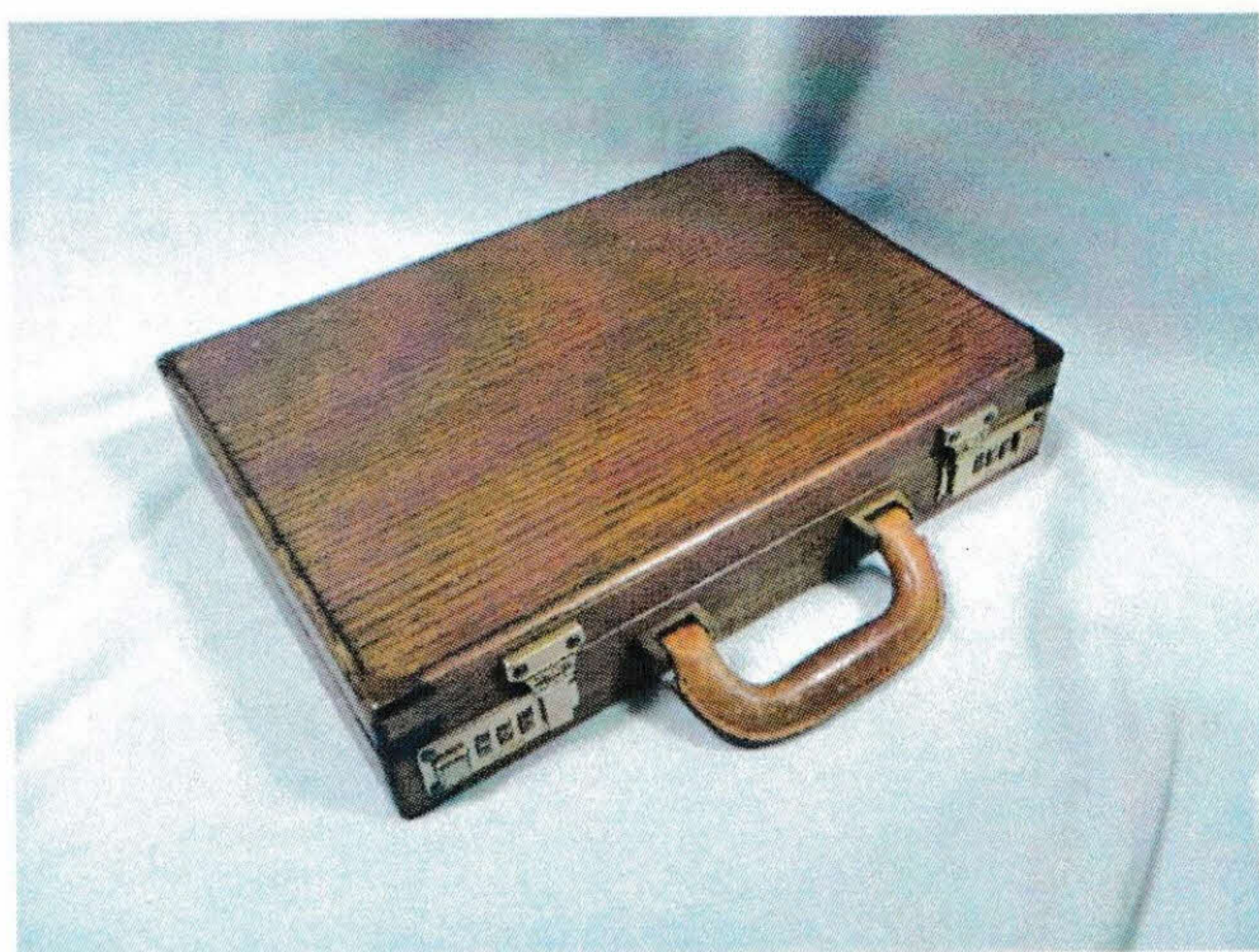


写真203

それより、もっと大事なことがあります。この「メンタル・イリュージョン・キー」はマジシャン一人でできないのです。「みかめくらふと」の説明書には一人でもできるし、その方法も書いてありますが、それは無理です。蓋を開けたケースの陰でごそごそするのはどう考えてもエレガントではありません。観客にタネがわからなければいいというものではないのです。カード・マジックでもそうですが、観客には正確な動きがわからなくても、「あ、いま何かやったな」と思われることは致命的です。それは、パスでもエルムズレイ・カウントでもメキシカン・ターンノーバーでも言えることです。いわんや、蓋を開けたアタッシェ・ケースの陰で番号の円盤を探すなどは論外です。

そこで、今回は、「みかめくらふと」の「メンタル・イリュージョン・キー」をマジシャンが一人で演じることに主眼を置いて構成してみました。解説の中で、自ずとタネは判明しますから、必要な用具を作るのはそんなに難しいことはありませんので、ぜひ、自分でも練習してみてください。

[現象]2人の観客の選んだ1～9の2つの数字で構成される2桁の数字が、予め、透明な板に掛けられていたキイ・ホルダーに印字・予言されています。

[必要なもの]

- ①キイ・ホルダーを掛けておくアクリルの板(写真204)
- ②磁石を埋め込んだキイ・ホルダー(写真204)
- ③11から99までの数字を印字した89枚の鉄芯入り円盤(写真は50枚だけ撮影)(写真205)
- ④89枚の円盤をセットしておくための縦型のクレジット・カード・ケース 3つ(写真205)
- ⑤隅に磁石の付いたアクリルのメモ・ボード(写真205)
- ⑥太めのペン 1本

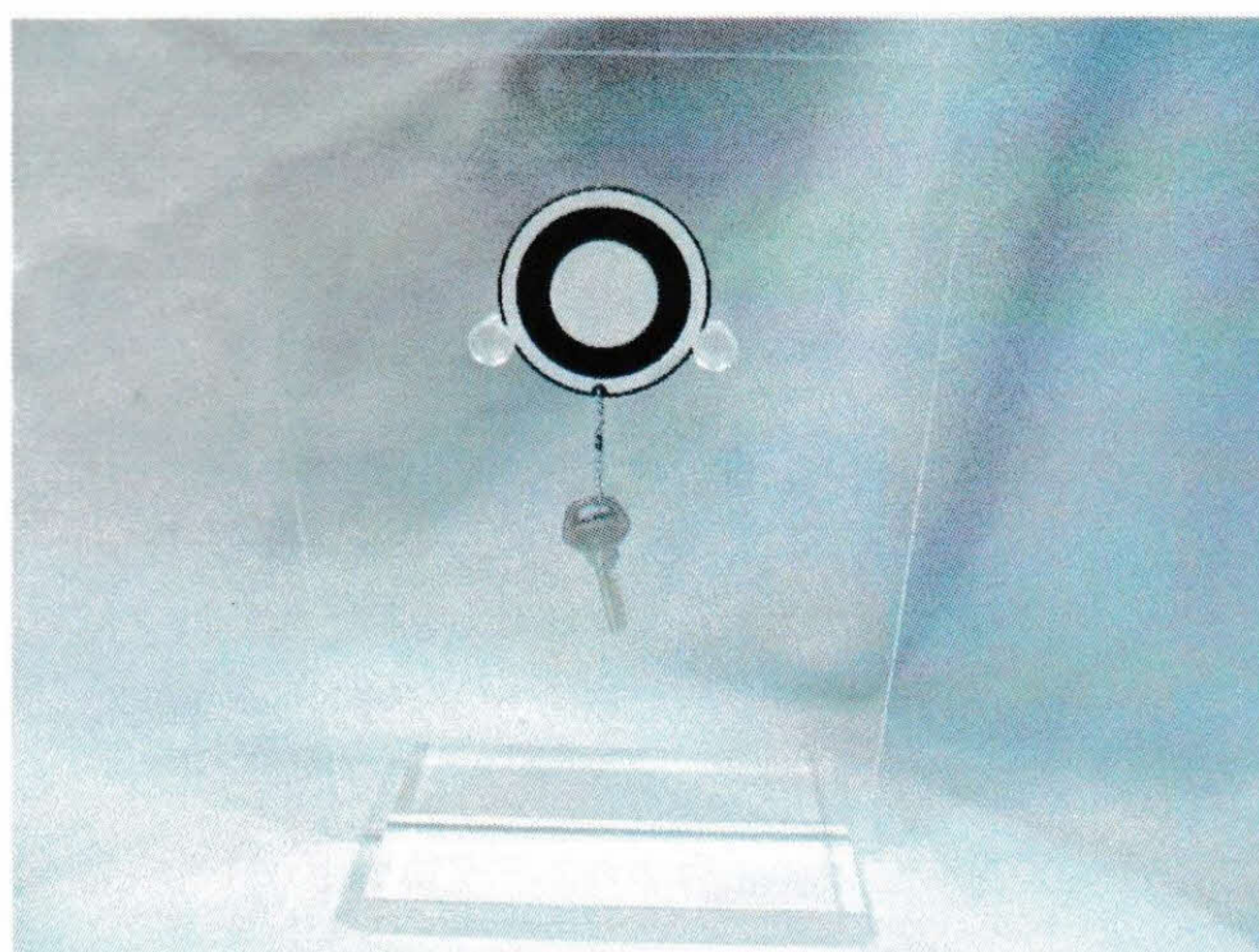


写真204

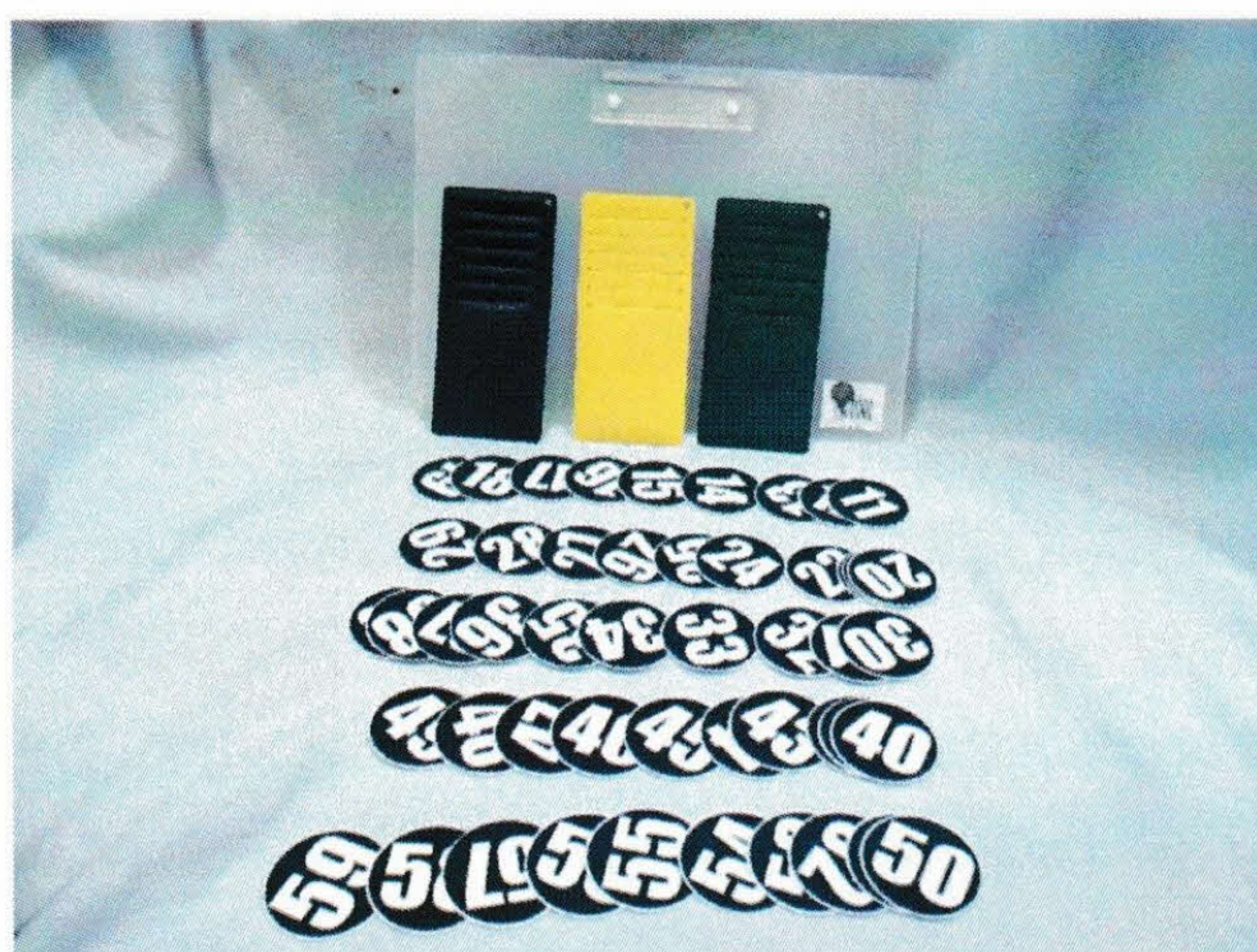


写真205

[準備]

①「みかめくらふと」の解説書との最大の違いは、あくまでも、この手品をマジシャン一人で行なうように考えたことです。したがって、そのための準備が必要です。

まず、「みかめくらふと」では、1から99までの99個の数字を選ぶ対象にしていたましたが、それ

を2桁の数に限定しました。その結果、観客が選ぶことのできる数字は11から99までの89個になりました。そのことは、演技全体の効果にはほとんど影響がありません。なぜなら、2人の観客のうち、最初の客がゼロを選ぶ確率はほとんどないからです。マジシャンが、演技の最初から、「ふた桁」と言ってしまうと、観客の中で、そのことに疑問を思う人はほとんどいません。

そこで、マジシャンは、選ばれる可能性のある印字された89個の円盤を用意することになります。これは、3つの縦型のクレジット・カード・ケースに29枚、30枚、30枚ずつに分散してセットしておきます(写真206)。解説の便宜のために、色の異なる3色のケース(黒、黄、緑)を使っていますが、これはすべて同じ色のケースでかまいません。

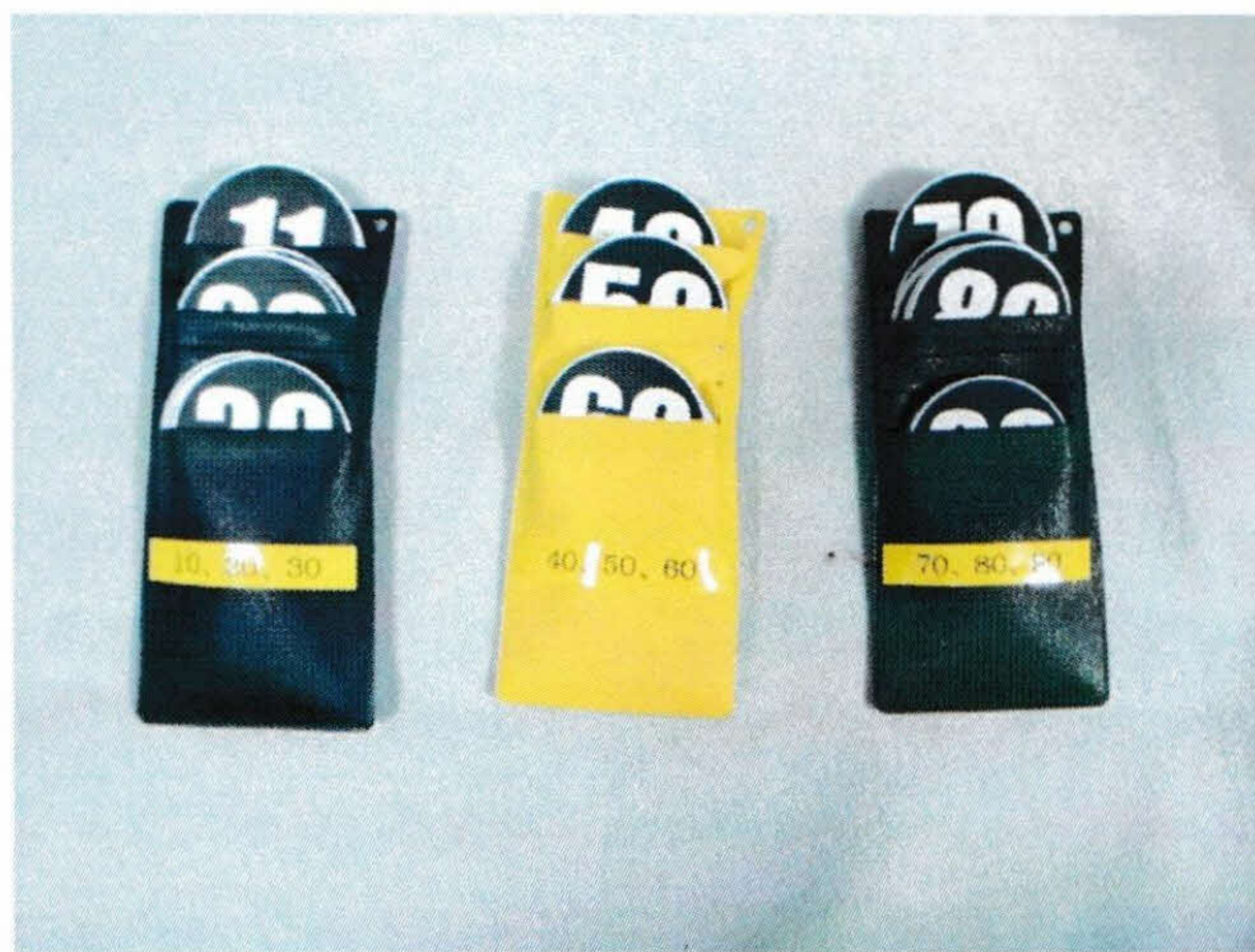


写真206

黒のケースには、11～19の9枚の円盤と、20～29までの10枚の円盤、それに、30～39までの10枚の円盤を、9枚と10枚ずつ、上中下にセットします(写真206)。このとき、カード用のスリットが深くて円盤が下に沈んでしまうおそれがある場合は、ステイプラーなどで留めてストッパーを作っておきます。

黄色のケースには、40～49の10枚の円盤と、50～59の10枚の円盤、それに、60～69の10枚の円盤を、やはり上中下に分けてセットします(写真206)。

最後に、緑のケースには、70～79の10枚の円盤と、80～89の10枚の円盤、それに、90～99の10枚の円盤を、これも上中下に分けてセットします(写真206)。

こうして準備した3つのケース(89枚の円盤)は、それぞれのケースごとに、上着の左内側に左奥から順に縫い付けるか安全ピンで固定しておきます(写真207)。場合によっては、強力な両面テープでもかまいませんが、上着の内側の繊維の質によっては、両面テープが強固にくっつかない場合がありますので、練習してみて、もっとも演技しやすい方法にします。また、写真207ではやや上下を付けて並行して準備してありますが、この部分は観客からは見えませんので、必ずしも並行である必要はなく、マジシャンのやりやすいセットの仕方であればかまいません。

また、写真206と写真207では、各円盤の数字がわかりやすいようにケースにテープで表示してありますが、これも必ずしも必須ではなく、ほぼ30枚ずつなので、そんなに迷うことなく選べる方は、この表示はまったく不要です。

実は、ひとつのケースには、30枚以上セットしようと思えばできないことはありません。極端なことを言えば、50枚と39枚の2つにしてもいいわけで、それでも演技に支障がなければそれでもいいと思います。



写真207

- ②ペンを上着の左内ポケットに入れておきます。
- ③キー・ホルダーは上着の右ポケットに入れておきます。

[やり方]

- ①マジシャンは、手にアクリル板と台座とメモ・ボードを持って登場します。観客の観ている前で、台座をテーブルの上に置き、そこにアクリル板をセットします。続いて、右手で上着の右ポケットからキー・ホルダーを出して、アクリル板に引っ掛けますが、このとき、キー・ホルダーの裏側が観客に見えないように注意します。メモ・ボードはテーブルの上に伏せて置きます。
- ②観客の中からまず1人の客を選びますが、これは、選択が任意であることを示すために、大きなスポンジ・ボールなどを用意しておいて、客席に投げて、受け取った方を選ぶか、さらに数回、客同士で客席の中に投げ合ってもらって、一定程度回ったら、そこで客を選ぶかします。
- ③最初の客に向かい、「これから、あなたともうひとりのお客さまとで数字を1つずつ選んでもらいます。そうしてお二人で2桁の数字を作ってくださいですが、まず、最初のお客さまですから、1から9までの数字のうち、どれでもひとつだけおっしゃってください」と言います。仮に客が「7」と言ったとします。
- ④「7ですね？わかりました。それでは間違えないようにここに大きく書いておきます」と言いながら右手で上着の左内ポケットからペンをゆっくりと取り出します。これは後の操作時間とも関わりますので、内ポケットのペンを探してゆっくり取り出すようにします。同時に、70番台の円盤は緑のケースの一番上にあることを確認しておきます。これは、次の2つめの数字の動作で迷わないためです。
- ⑤メモ・ボードの紙に、大きく「7」と書いたら、ペンは再びキャップをして上着の左内ポケットにしまいます。客に紙に書いた「7」を示します(写真208)。

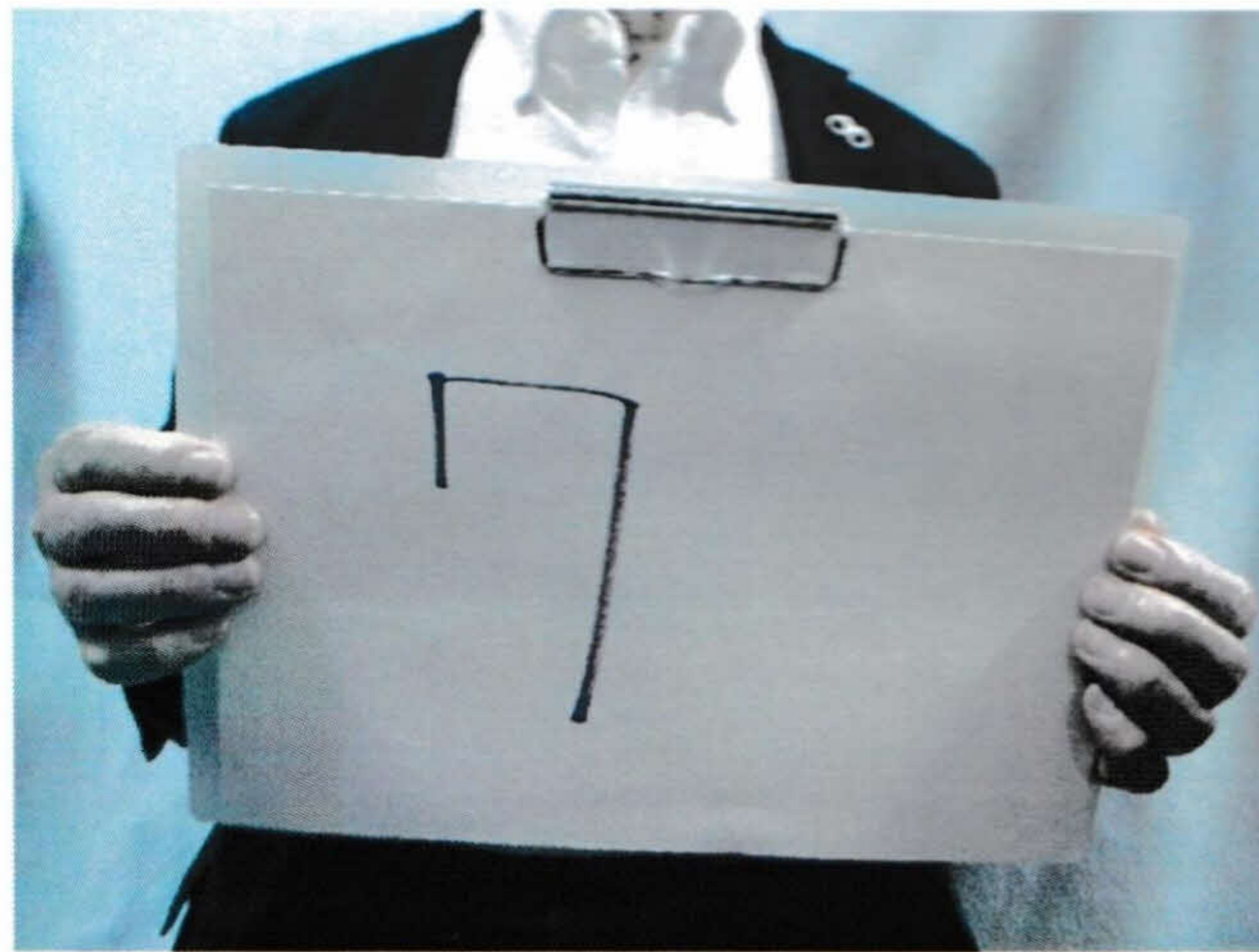


写真208

- ⑥メモ・ボードを一旦テーブル上に置いて、「それでは、もう一度スポンジ・ボールを別の方に投げてください。後ろ向きで投げてくださいませんかよ」と指示をします。何回か投げたら、そこで止めて、二人目の客に、「あなたも、1～9の間で好きな数を選んでください」と言います。客が、「5」と言ったとします。
- ⑦「5ですね？」確認しながら、再び、上着の左内ポケットのペンを取りに行く動作で、まず、左手で上着の端を掴み、右手で「75」の円盤を選んで取り上げます。これは、次のようにします。まず、右手の指先で、70番台のすべての10枚の円盤をケースから抜きだします。次いで、親指で71から順に内ポケットの中に落として行き、75だけを確保したら、残りの円盤をそのまま内ポケットの中に落としてしまいます。残った75番だけを上着の陰で左手に渡します。ただちに右手でペンだけを出して来ます(写真209)。当該の円盤を選んで左手に渡すまでの時間は長くて10秒前後です。



写真209

- ⑧左手は自然な形で上着の端を放し、円盤をパームしたままメモ・ボードを持ちます。右手は紙に「5」を描き加えて「75」とし、観客に見せます。このとき、円盤は一旦ボードの隅の磁石にくっつけて、左手も空であることを何気なく示します。「お二人のお客様が選びなった2桁の数字は

75でした」とボードを見せます(写真210)。このとき、ペンは右手に持ったままで、左手は空であることがわかるようにします。

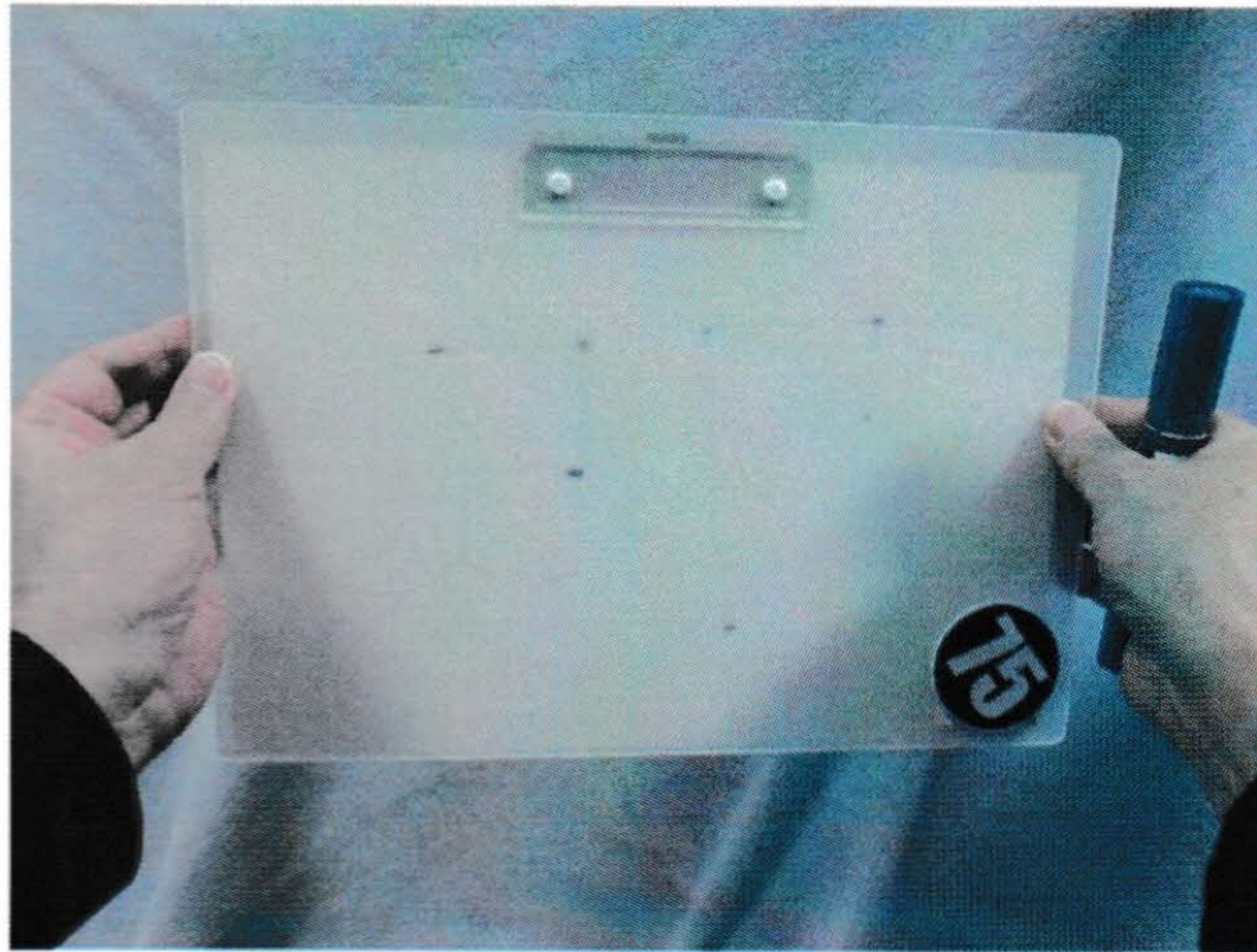


写真210

- ⑨メモ・ボードを左手だけで隅を持ち、右手のペンを上着の内ポケットにしまいます。左手を、ちょうど、円盤が手に隠れるような位置に持って来ます。
- ⑩メモ・ボードを、空いた右手でテーブル上に立てかけます。左手は75番の円盤をパームしています。右手でアクリル版のキイ・ホルダーを取りに行きます。キイ・ホルダーを左手に渡します。このとき、円盤をキイ・ホルダーに入れて磁石にくっつけます(写真211)。



写真211

- ⑪「選ばれた数字は75でしたね？ご覧ください」と言って、まず、メモ・ボードを指差して2桁の数字を確認し、この間に左手の親指で数字の円盤を回転させて数字の向きを調整します。次いで、右手で鍵だけを持って、まだ数字の面が見えないように、キイ・ホルダーを観客に示します。そこで、ゆっくりとキイ・ホルダーを回転させて数字の面を観客に示します。「75」が印字されていますので観客から驚きの喚声があがります(写真212)。鍵とキイ・ホルダーとは短いループの鎖で繋がっていますので、鍵を持って方向性を間違えなければ、誤って数字の面が観客に見えたりはしません。回転して見えそうになったら反対方向に力を入れればキイ・ホルダーの回転は

止まります。



写真212

[別のやり方]

- ①2つ目の数字が選ばれるところまでは同じです。2回目にペンを取り出すとき、上着を掴む位置の左上の裏に小さな磁石を取りつけておけば、選ばれた番号の円盤をそこに一時的にくっつけておくことができます(写真213)。



写真213

- ②この状態で、ペンだけを取り出せば、左手は空ですし、公明正大にメモ・ボードに「75」と書いて観客に示すことができます。そして、メモ・ボードをテーブル上に置いたあと、再び、ペンをしまう動作で、左手で上着を開いたときに、ペンをしまっ、左手は上着の磁石に付いた円盤をパームしてくるのです。後は同じです。

[コメント]

この限定版の説明書の最後に、「追加製作は致しません」とまで書いてありますから、世の中に出回っているフル・バージョンの「メンタル・イリュージョン・キー」は実際に300個なのだと思います。所有されている方は、今回の masquerade で少しは演じてみる気になったのではないのでしょうか。

CTG の基本概念

麦谷眞里

(まえがき)CTG というのは、“Coins Through Glass”の略で、アメリカ合衆国で手品を扱う有名なテレビ番組である“Penn & Teller's Fool Us”で Alex Geiser によって演じられたコイン・マジックです。その後、Bob Kohler によって商品化され299ドル(約32000円)で売り出されました。観客の目の前で、観客の持ったガラス(実際はアクリル)のテーブルをコインが貫通します。鮮やかです。これまでのコイン・スルー・ザ・テーブルを知っているマニアからはまさに信じられないような現象です。Alex Geiser の手順は3段から構成されており、もちろんコイン・ギャフを使ってはいるのですが、この3段からなる手順の最初の1段は、まったく普通のコインだけでも演じることができるのです。驚くべきことです。2段目、3段目はコイン・ギャフを併用するために、現象が鮮やかであるばかりでなく、マニアでもちょっとタネがわかりません。特に3段目は、何度見ても驚かされます。シェルとマグネティック・コインというギャフ・コインの道具の革命に、Alex Geiser の技術の革命が加わって初めて実現した現象なのです。この鮮やかなテーブル貫通現象は、マジシャンなら誰でもやってみたいと思うほど魅力的です。

以下には、コアになるコンセプトと基本的なハンドリングを述べるに止め、Alex Geiser が演じた詳しいハンドリングやフル・ルーティンの解説はしてありません。興味のある方は、ディーラーからご購入ください。アクリルのテーブルはもちろんのこと、ケネディ・ハーフで構成されたギャフ・コイン一式が付いて来ます。

1. ガラス(アクリル)の上から下へコインが1枚貫通する

[必要なもの]

①アクリルの板(縦28cm×横35cm程度)。四隅に飾りあり(写真214)。左下隅は光の反射。

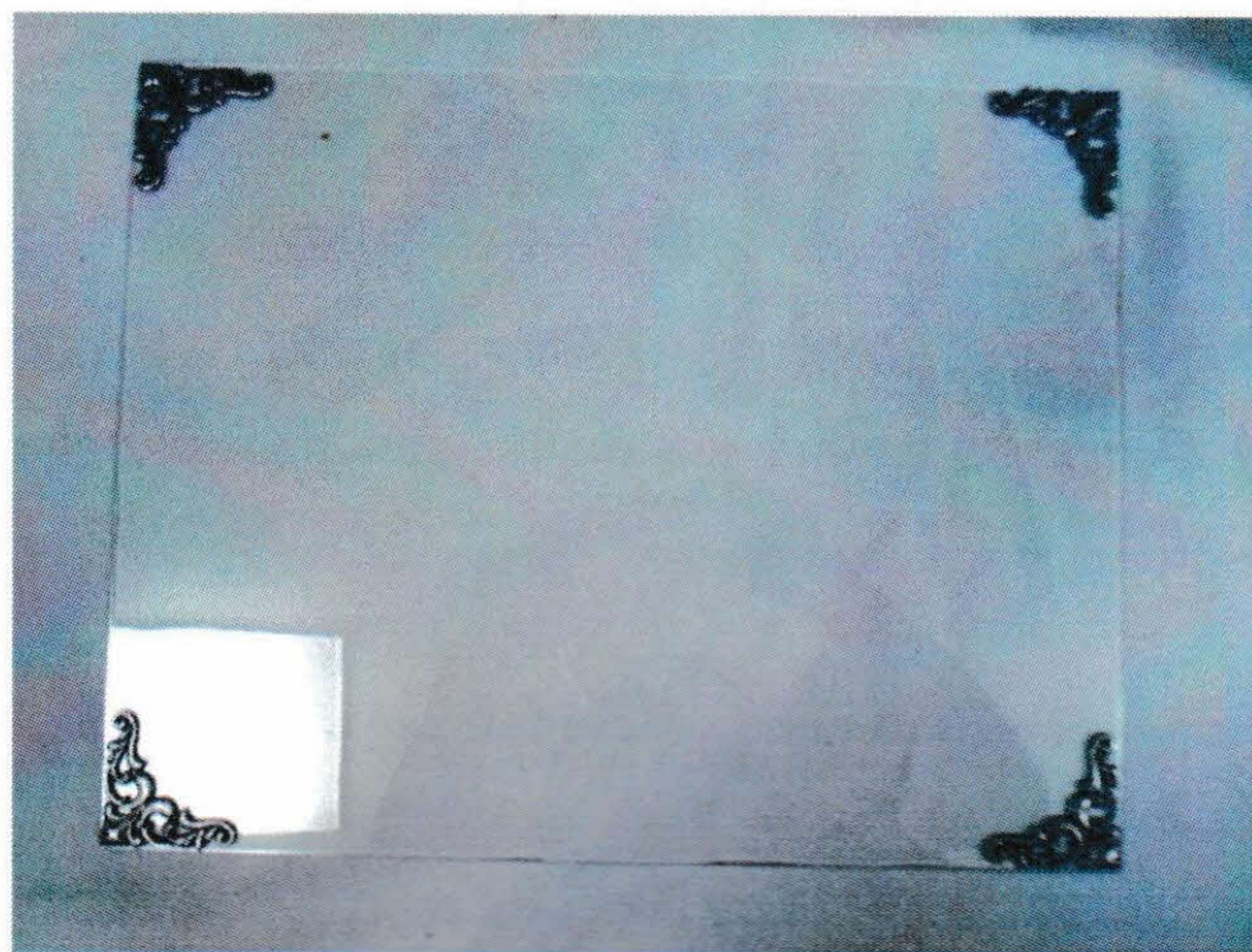


写真214

②ハーフ・ダラー 3枚(普通のハーフ・ダラー3枚です)

[やり方]

- ①解説の便宜のために、3枚のハーフ・ダラーを区別しやすいように赤と青と黄色のステッカーを貼っておきます。まず、3枚のコインを、ガラスの上に三角形に置きます。赤が三角形の頂点で、黄色が左側、青が右側です(写真215)。ガラスは箱の上にブリッジ状に渡してあります。

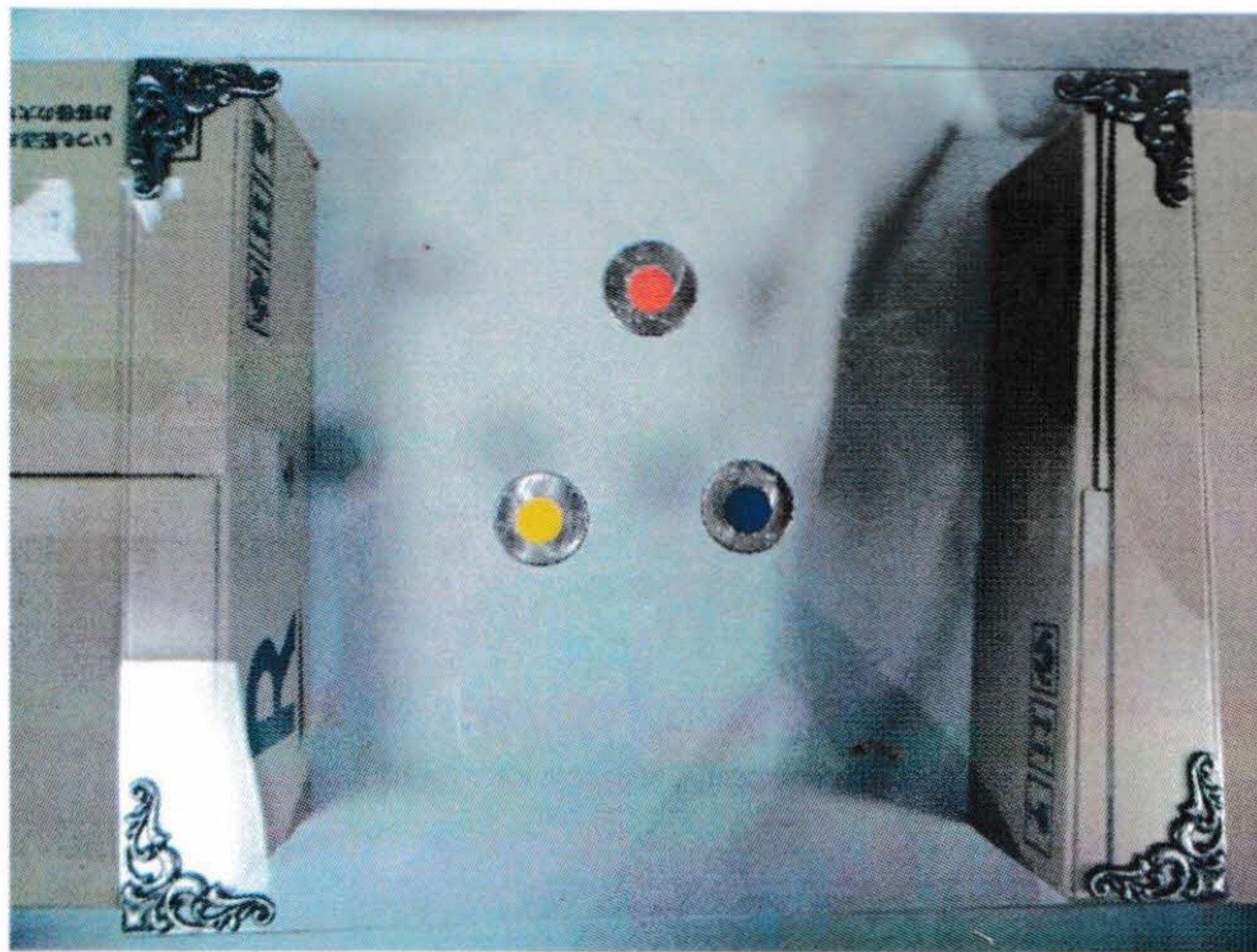


写真215

- ②赤のコインを左手で取って、右手にシャトル・パスして、あたかも右手に持っているように見せて、右手をガラスの上、左手をガラスの下にして、赤のコインは、左手の小指で青のコインの下辺りで下からガラスに押し当てます(写真216)。写真216は、右手を除いたところで、実際は、この部分はガラスの上から右手でカバーされています。



写真216

- ③右手は、あたかも赤のコインをガラスの上で指先で撫でているような動きをしながら、実際はガラス上の青のコインを、進展した右手の下で、三角形の頂点の位置に送ります。ここで、一旦右手の指先だけを持ち上げてガラスから離すと、青のコインがガラスの上にあることがわかります。観客からは、左手で赤のコインを取り上げて右手に渡し、右手で、ガラスの上に置き直したとし

か見えません。実際は、赤のコインはすでにガラスの下で左小指で押さえられており、観客から見えているガラスの上のコインは青のコインです(写真217)。写真217は、右手は取り除いてあります。

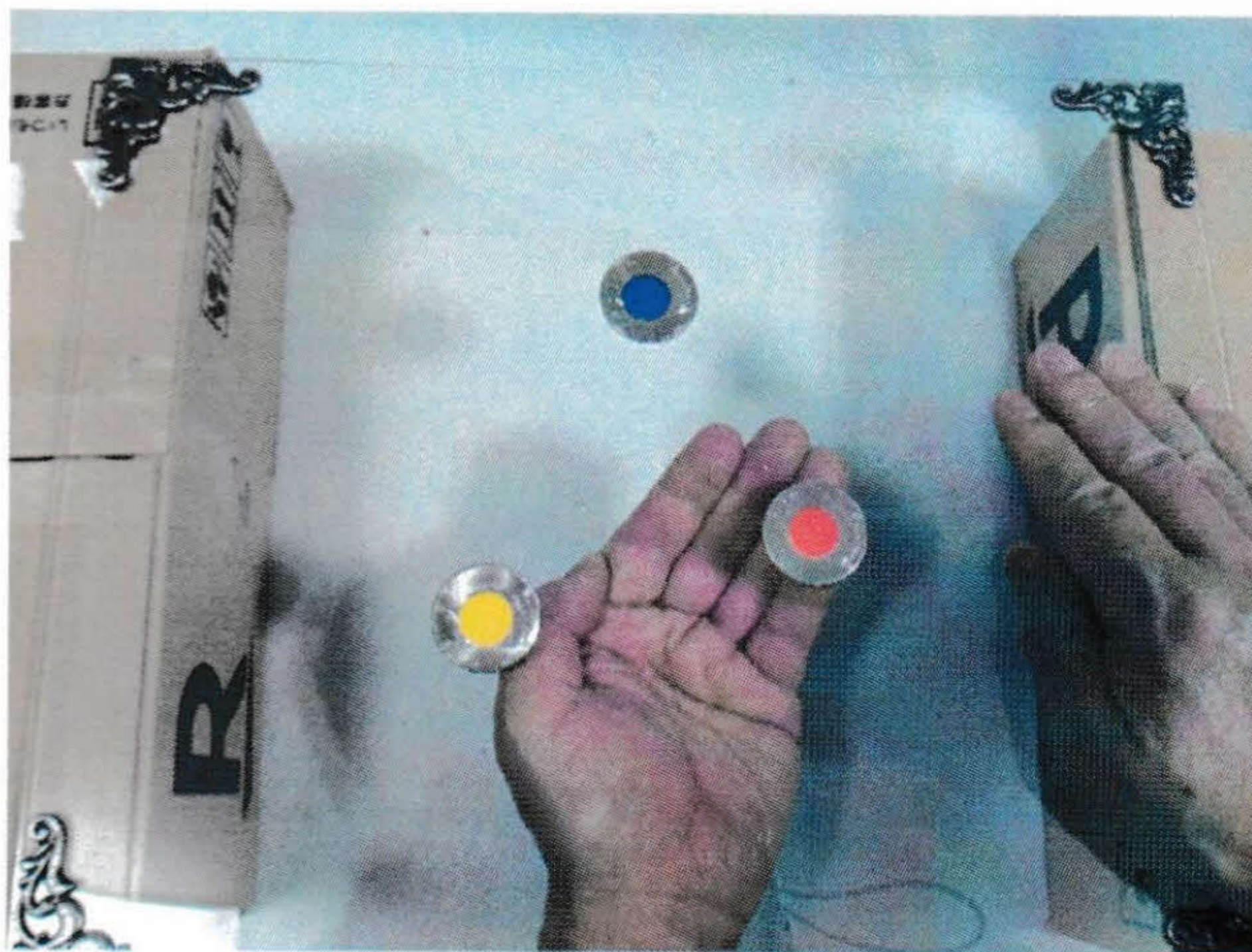


写真217

- ④右手でガラス上の青のコインを撫でながら指先から親指の付け根の赤のコインの位置まで送ります。反対に、ガラスの下では、左小指で赤のコインをガラス上で青のコインがあった三角形の頂点の位置まで滑らせます。両手を連動させると、あたかも、青のコインがガラスの下へ貫通したように見えます(写真218)。実際にガラスの下に見えているコインは赤のコインです。

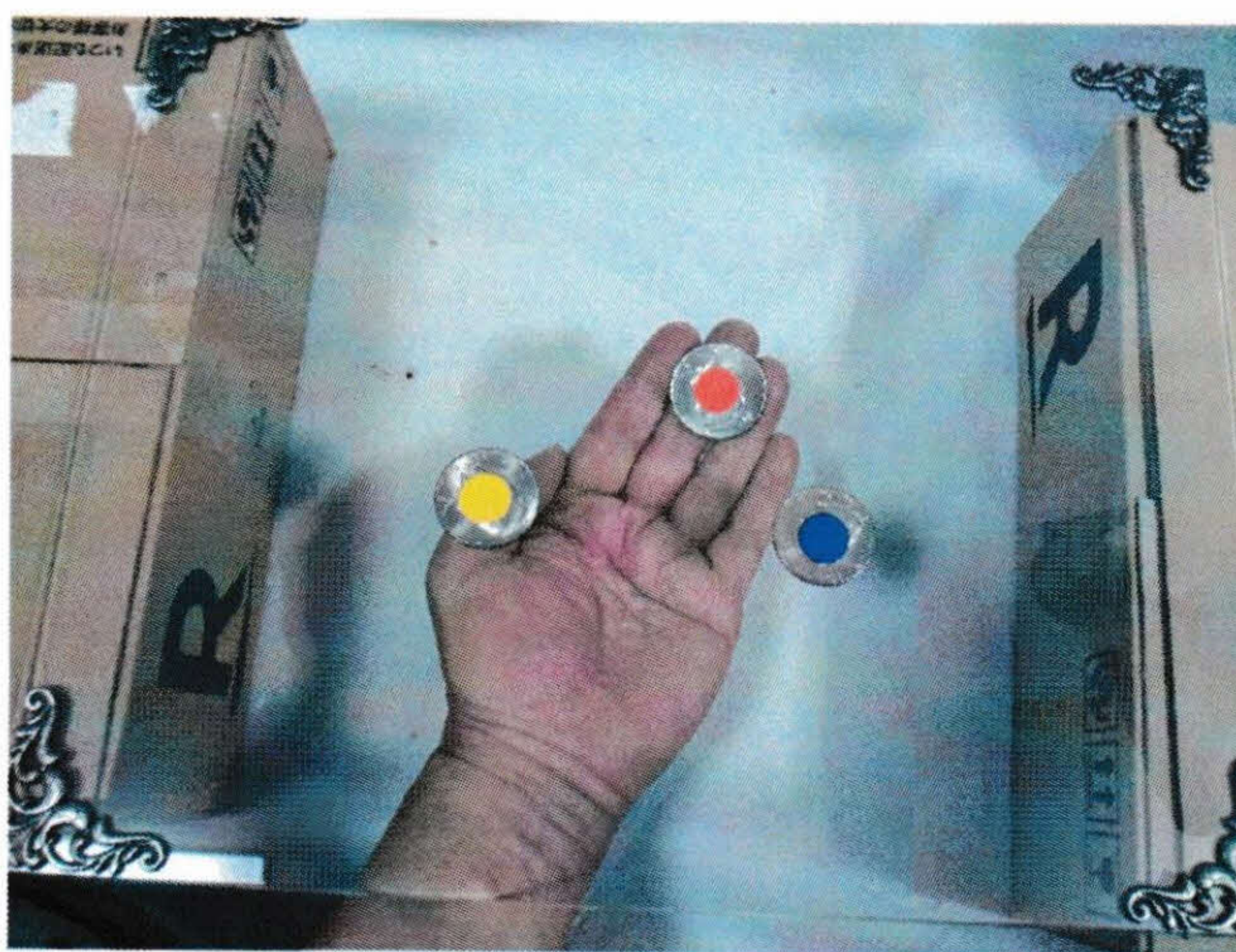


写真218

2. すでに1枚のコインが貫通した後で2枚目のコインが貫通する
[必要なもの]

以下は、すべてハーフ・ダラーです。

- ①マグネティック・コイン 1枚(解説では黄色)
- ②エキспанディッド・シェル(鉄を貼りつけたもの) 1枚(解説では赤)
- ③普通のコイン 2枚(解説では青と白)

[やり方]

- ①ガラスを貫通したコインがすでに1枚ガラスの下にあるとします。これは、エキスパンディッド・シェルの被さった赤のコインとします。シェルの被さった下の普通のコインは白です。ガラスの上には、黄色のマグネティック・コインと普通の青のコインとがあります(写真219)。

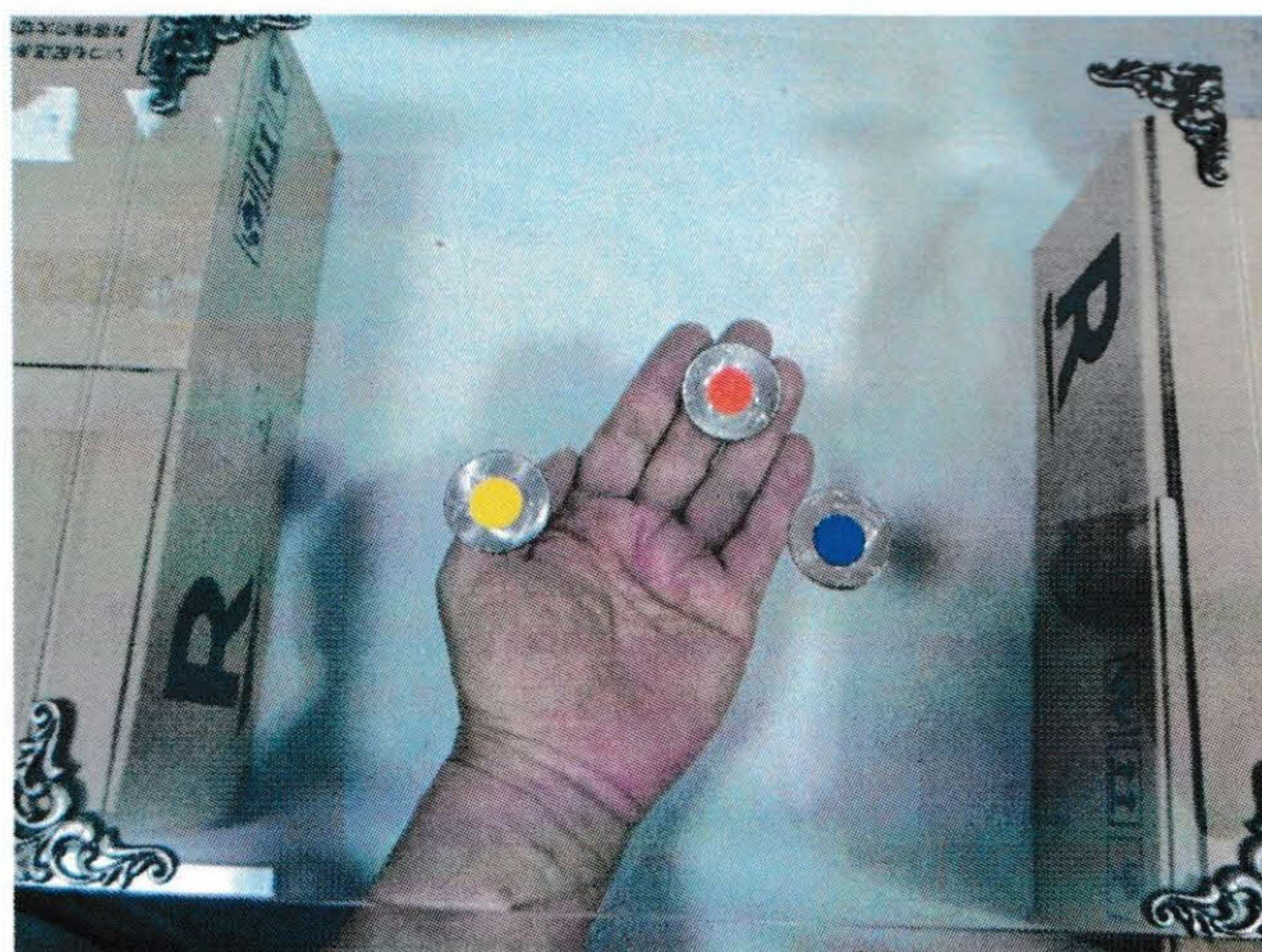


写真219

- ②今度は普通の青のコインをガラスの下に貫通させます。このコインに集中するため、黄色のマグネティック・コインを右下に引いておきます。右手の指先で、青のコインを覆って撫でます。このとき、右掌で黄色のコインも覆うようにします。この状態で、あたかも青のコインを撫でながら右手を円状に動かして、青のコインの位置と、黄色のマグネティック・コインの位置とを入れ替えます(写真220)。写真220は、右手を取り除いたところです。



写真220

- ③この状態で、黄色のコインをガラスの下にある赤いコイン（シェル付き）の上に持っていきます。同時に、左手指先を上挙げて、ガラスの下から赤いコイン（シェル付き）が黄色のマグネティック・コインにくっつくようにします。すると、磁石の力で、赤いコインのシェルがガラスを通して黄色のマグネティック・コインにくっつきます。このまま黄色のコインを手前に引き、同時に、左手を下へ下降させれば、シェルと、その下の白の普通コインは離れ、シェルだけが手前に動きます。

(写真221)。写真221は、わざと右手を挙げて撮ってあります。



写真221

- ④シェルが離れたら、再び左手をガラスに下から押し当ててシェルを左手とガラスで固定し、そのまま右手を手前に引くと、左手には赤いコインと白のコインが残り、あたかもコインが1枚ガラスを貫通したように見えます。右手は、黄色のコインと青のコインとを手前に引いてガラスの手前の端で青のコインをクラシック・パームしつつ右手の指先で黄色のコインを掴んで取り上げ、ちょうどコインが通過した白のコインの上を軽く叩きます(写真222)。2枚目のコインがガラスを貫通しました。

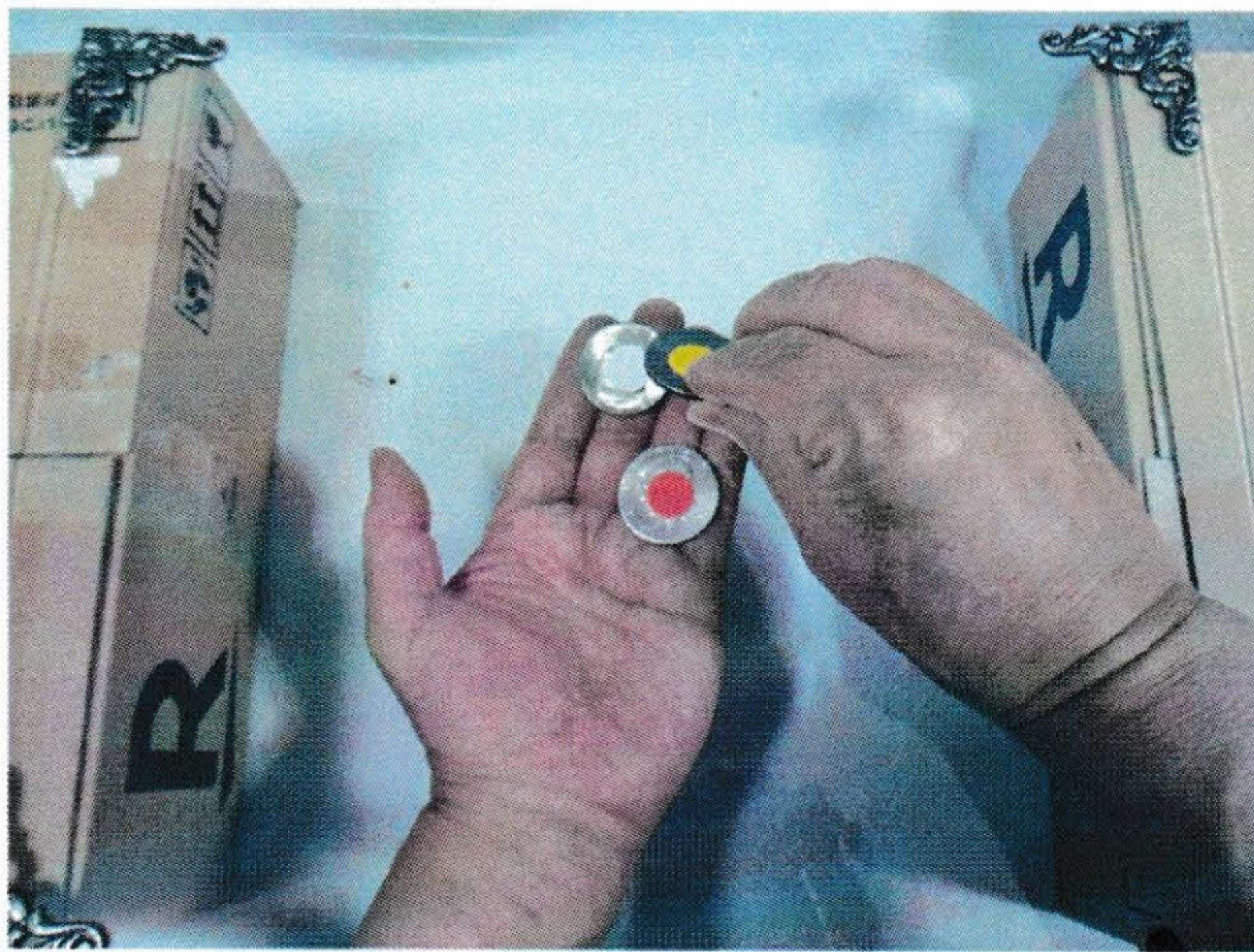


写真222

[追加]

1. と2. とを連続して行なうことができます。なぜなら、最初の1枚目のとき、シェル付きの赤いコインをあたかも普通のコインのように扱えばいいからです。そして、黄色いコインも最初からマグネティック・コインにしておけば、連続して2枚のコインが観客の目の前でガラスを貫通したように見えます。この段階から、さらに次の3. に進むことができますが、その説明はあえて省略して、3. のやり方だけを解説します。ただし、もちろん、2. の最終形から3. の最初の形に持って行くにはどういうハンドリングを行えばいいかは、コイン・マニアの方だったら容易に推定できます。

3. 1枚のコインがガラスを貫通して客の手の上に落ちる。

[必要なもの]

以下は、すべてハーフ・ダラーです。

- ①マグネティック・コイン 1枚(解説では黄色)
- ②エキスパンディッド・シェル(鉄を貼りつけたもの) 1枚(解説では赤)
- ③普通のコイン 2枚(解説では青と白)

[やり方]

- ①もし、ガラスのテーブルを一人の客に支えてもらっていたら、右手を放してもらいます。客が保持していたガラスの右手部分はマジシャンが左手で保持します。自由になった客の右手をガラスの下に掌を上にして出してもらい、この右手の掌側に白のコイン、指先側にシェルの被さった赤いコイン(中には青のコイン)を載せます(写真223)。客の手はシェーマです。

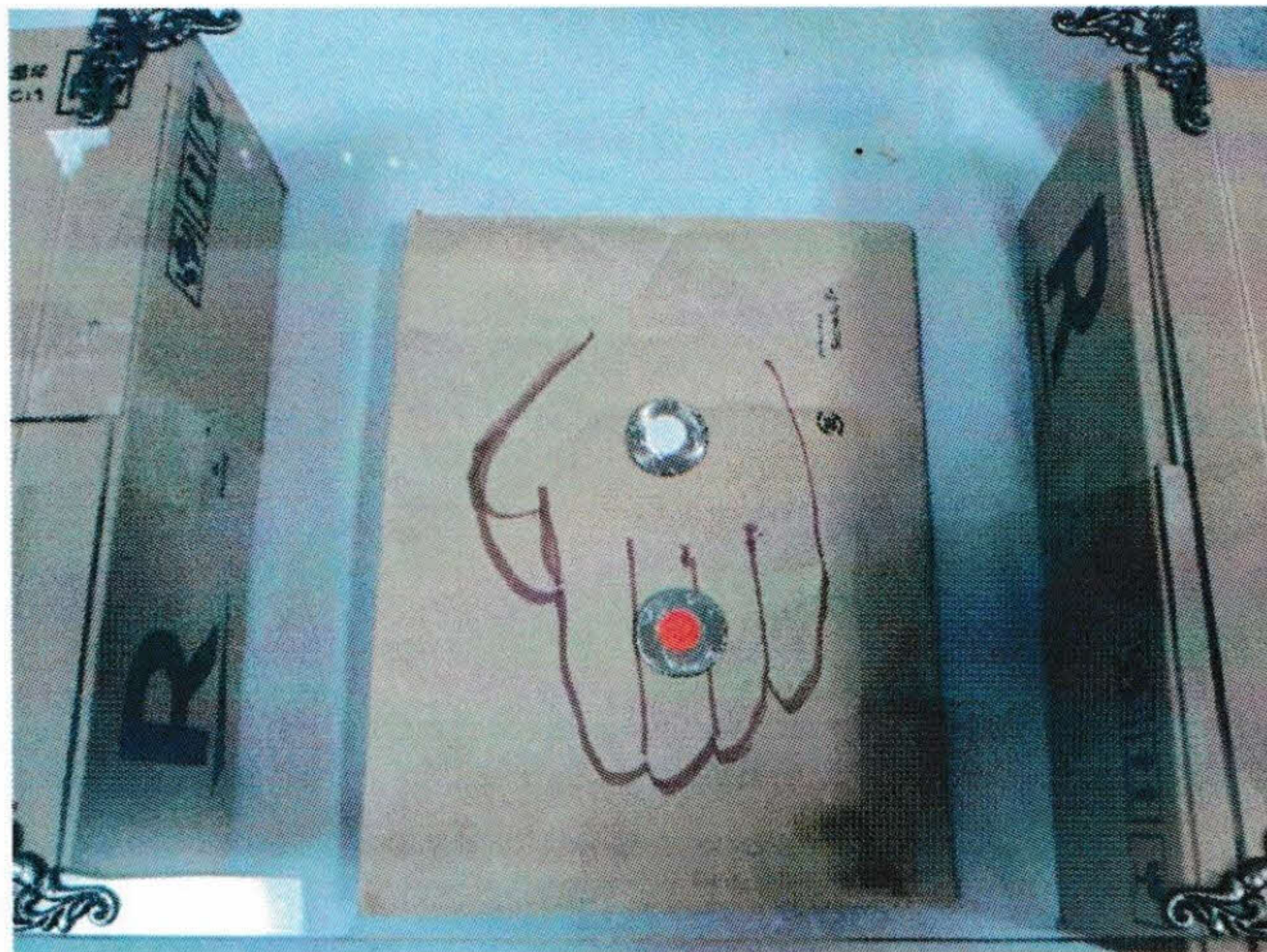


写真223

- ②空いている右手で黄色いマグネティック・コインをガラスの上に置きます。黄色いマグネティック・コインを、客の手の上にある白のコインと赤いコインとの間に置きます(写真224)。

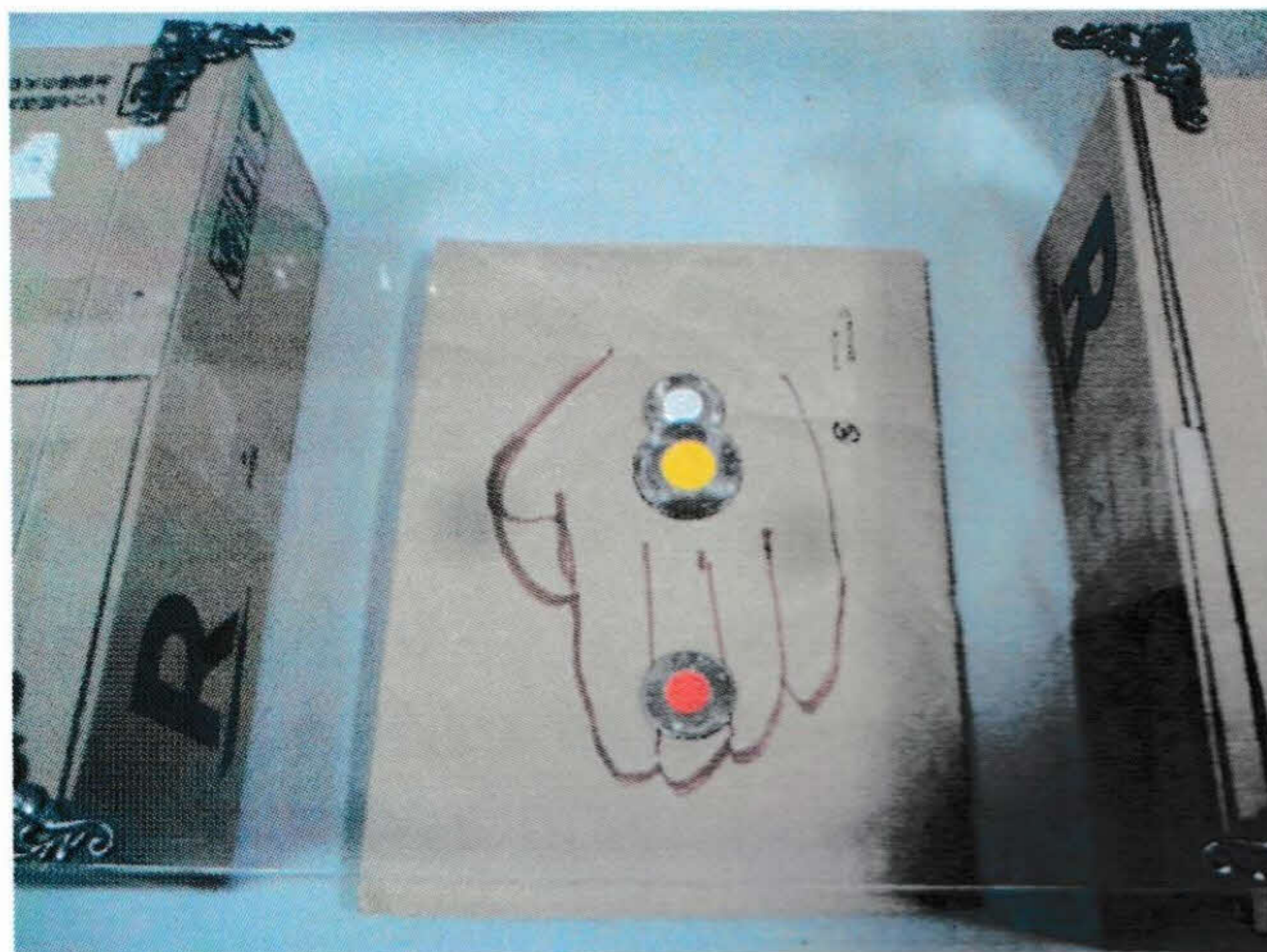


写真224

- ③このとき、ガラスの上にある黄色いマグネティック・コインとガラスの下の客の手の上にある赤いシェルとが引き合わないよう、それぞれのコインの扱いに注意します。それには、客の手の上にある白のコインと赤いコインとを十分に離しておくことと、不用意にガラスの上の黄色いコインとガラスの下の赤いコインとが近づかないようにすることです。
- ④写真224の状態、客に、2枚のコインがガラスの下で客の手の上であり、1枚のコインがガラスの上で客の手にある2枚のコインの間に位置していることを確認します。右手で、ガラスの上の黄色いコインを覆います。撫でながら、掌の下の方でガラスの下の赤いコインの上に持って行きます。客の手をやや上方にくっつけてもらいます。このとき、黄色いマグネティック・コインで、赤いコインのシェルをくっつけます。同時に客に、右手をガラスからやや下方に離して客から見て時計方向に右横に回転するようにお願いします。これは、客の手の上の2枚のコインをガラスの上から確認するためです(写真225)。このとき、すでに、マジシャンの黄色いコインの下に赤いシェルがくっついていますが、客には気が付きません。マジシャンの右手は省いてあります。



写真225

- ⑤客の手を再び反時計方向に回転させて元に戻します。右手で黄色いマグネティック・コインとガラスの下でくっつけているシェルを客の手の上に持って来ます。客の手の上にある、2枚の青と白の普通のコインの間に来たら、ガラスを持っている左手をちょっと下げて、ガラスでシェルを固定します。そのまま、右手を撫でる感じで黄色いマグネティック・コインを引くと、赤いコインがガラスを貫通して客の手の上に落ちたように見えます(写真226)。実際に落ちたのはシェルです。
- ⑥右手はそのまま黄色いコインをガラスの手前の端まで引いてクラシック・パームし、その手でガラスの手前を掴みます。ガラスを取り除いて、左手で客の右手から、3枚のコインを順に重ねて集めます。するとシェルは普通のコインに被さりますから、そのままコインを右手に渡すと、右手は黄色いコインが加わって3枚になります。これで元通りの3枚のコインになりました。
- ⑦⑥で、右手で「ガラスを取り除いて」と書きましたが、横に置ける場合などは問題ないのですが、置けない場合は、ガラスを左腕の脇に挟んで、この左手で客の右手からコインを重ねて取り上げるようにします。そうすると、客にも、この体勢が苦しいとわかりますから、ただちに取上げたコインを右手に渡すことになります。あるいは、ガラスを左脇に挟んだら、空いた右手で、客の

右手からコインを重ねて取り上げてもかまいませんが、右手に1枚クラシック・パームしているの
で、注意してください。

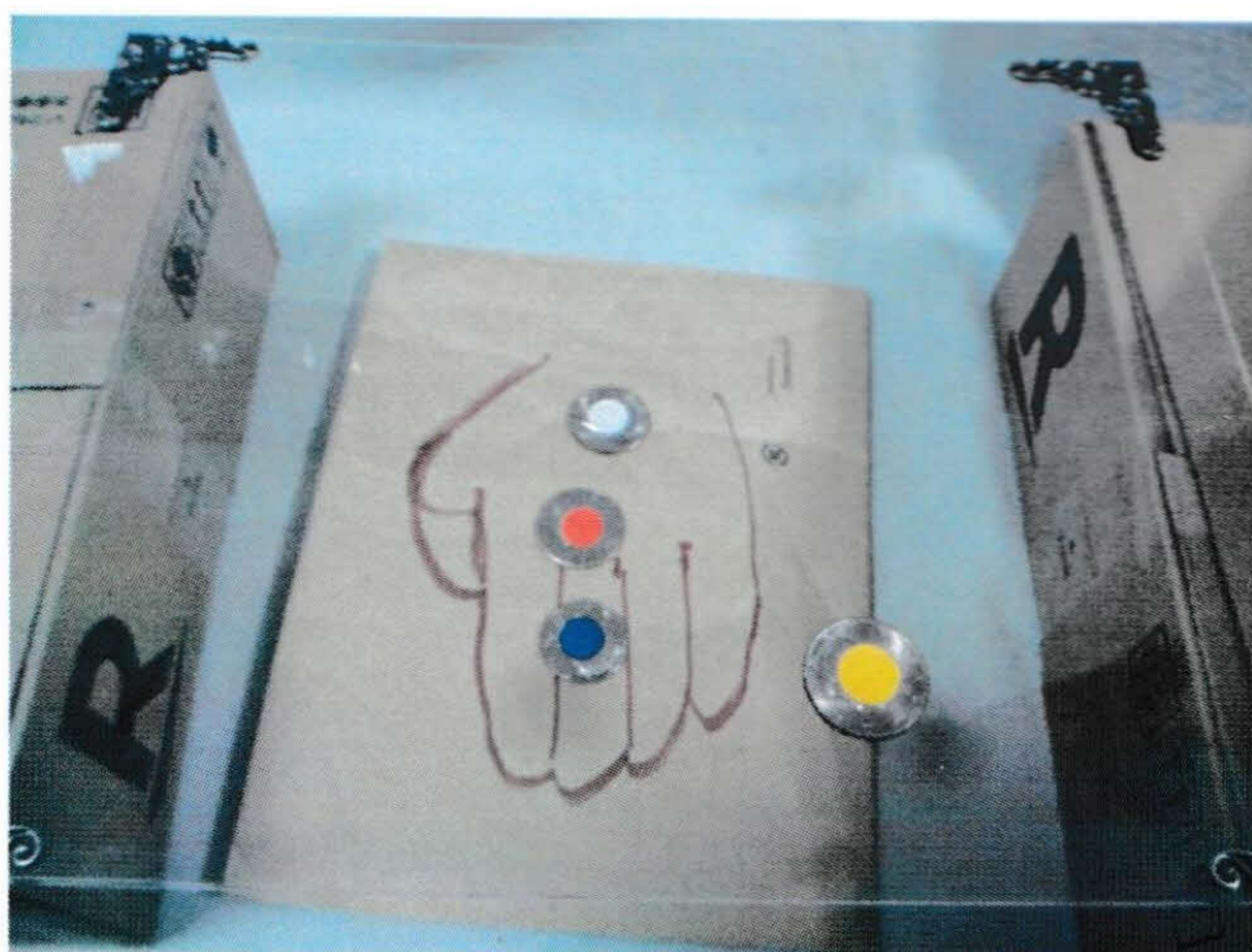


写真226

[コメント]

以上が、CTG の原理というか概念です。3段を組み合わせて流れるように演技するのには相当な練習が必要です。言うまでもないことですが、実際の演技ではそれぞれのコインにステッカーの印がついていけませんので、すべてのコインはまったく同じ外見に見えます。また、それだからこそ観客からは、まるで本当にコインがガラスを貫通したように見えるのです。上の解説では原理の骨子だけを解説してありますが、実際は、マジシヤンの台詞とか客の持っているガラスの位置とか、細かい注意が必要です。鉄のシムの装着されたエキスパンディッド・シェルと磁石が内蔵されたマグネティック・コインとがあれば、上の CTG は基本的に演じることができますので、自分で工夫されて、いろいろ演じられるのもお勧めです。しかしながら、できれば、一度、Alex Geiser 自身の解説を DVD などでお聞きになると、いろいろ勉強になります。

突然ですが、問題です！

麦谷眞里

(まえがき)次に問題として提出する手品は、かつて、Clarence Miller という人が作って売りだした“Nuts and Bolts”という手品用具をエジプト風のデザインで豪華に作り直して販売した商品です。販売したのは Magic Wagon で価格は270ドル(約28000円)でした。すでに在庫はありません。現象は単純ですので、写真で逐条的に説明しますから、ぜひ、どのように行なうのか、「タネ明かし」を見る前に考えてみてください。ヒントは、これだけの見栄えのいい手品用具なのですから、当然にもスライハンドではありません。ただ、練習しないで自動的にできるかという、これはなかなか容易ではないのです。一定程度の練習が必要です。

[現象]①ツタンカーメンのお面をデザインした箱を見せます(写真227)。



写真227

②前面のツタンカーメンのお面の扉を取って中を見せますが、中には何もありません(写真228)。



写真228

③箱の中の床にツタンカーメンの指輪を置きます(写真229)。



写真229

④箱の前面の扉を閉じます(写真230)。



写真230

⑤箱の横からツタンカーメンの杖を差しこみます。杖は反対側に貫通します(写真231)。



写真231

⑥前面のツタンカーメンのお面の扉を開けると指輪は杖からぶら下がっています(写真232)。

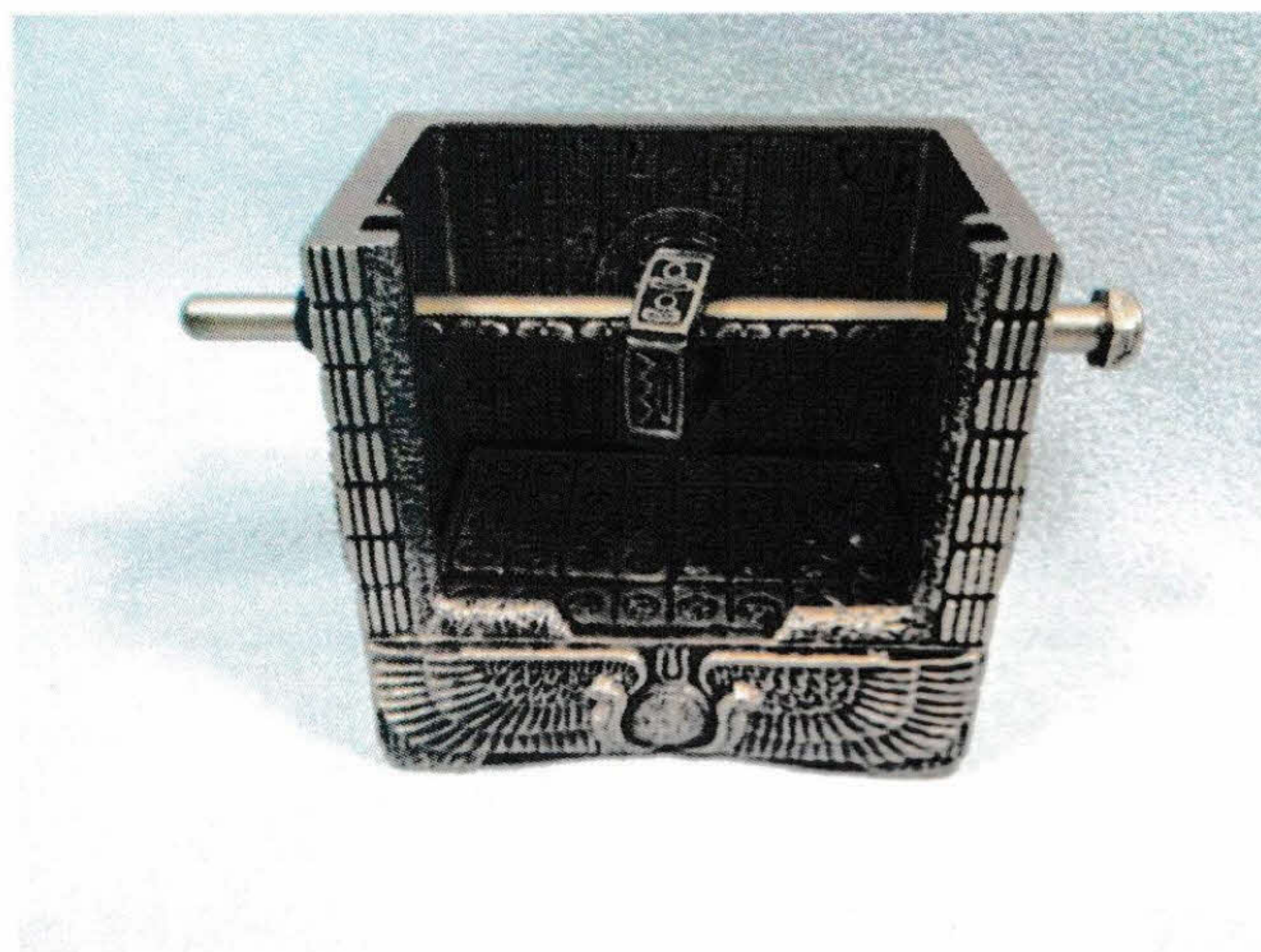


写真232

⑦手品用具の広告がいつもそうであるように、いくつかの項目は敢えて書いてありません。

[タネ明かし]

①当然ですが、Clarence Miller のオリジナルの商品をお持ちの方にはまったく無意味な問題でしたので、その場合は、お詫びします。その“Nuts and Bolts”のもともとの価格はわかりませんが、かつてアメリカのオークションでは75ドル(約8000円)で落札されていました。オリジナル製品は、木製の普通のデザインでした(写真233)。

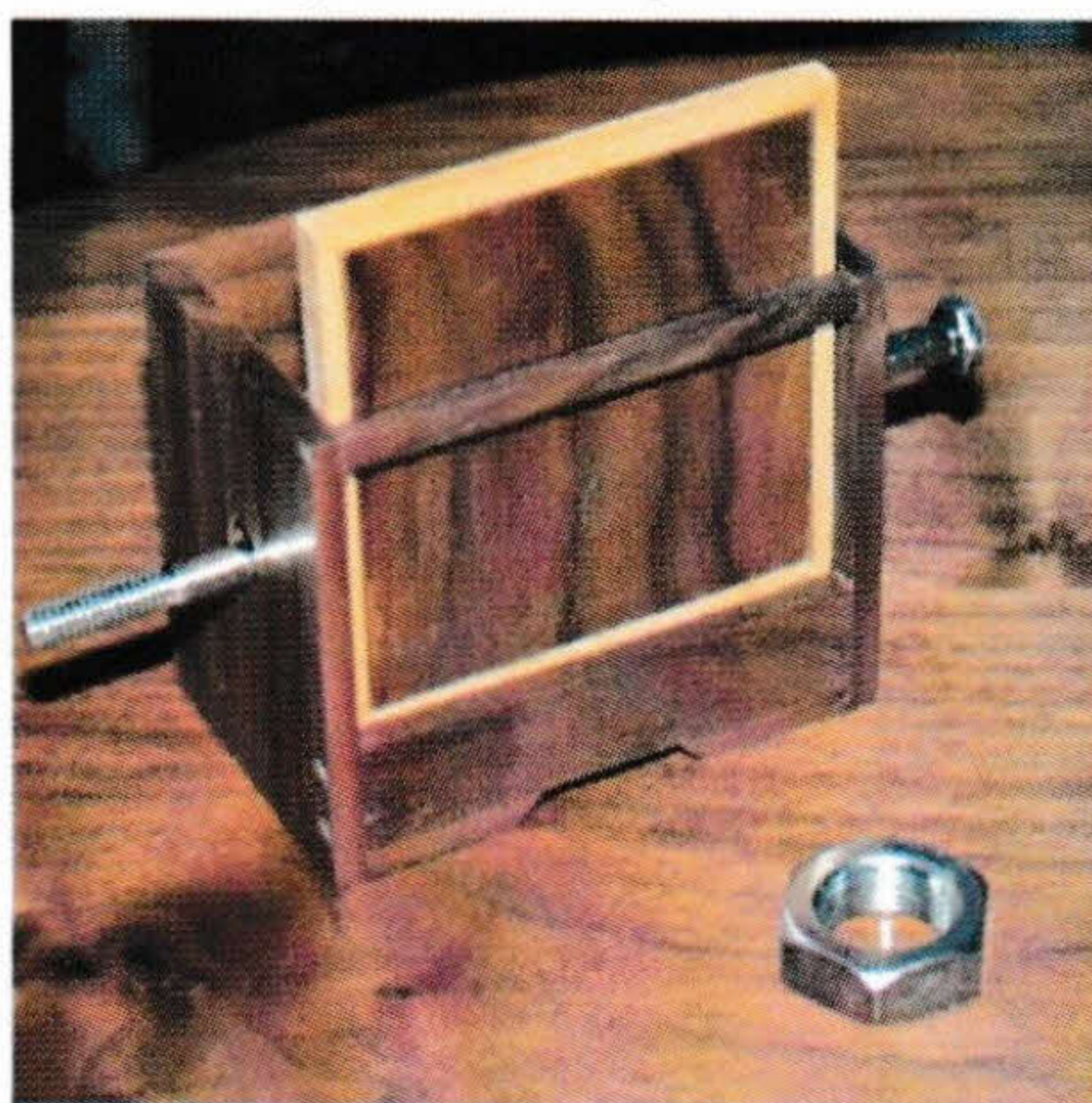


写真233

②それをエジプト風のデザインにして豪華に仕上げたのには感心します。まさに、「新しい瓶に古い葡萄酒」といったところでしょうか。ナットとボルトを指輪と杖にして、指輪をナットのように六角形にしたところに苦労の後が見えます。ただの丸い指輪では、うまく固定できなかったのかもしれませんが。

③六角形の指輪は当然にも2つあります。外見はまったく同じですが、ひとつのほうには磁石にくっつくように鉄が埋め込んであります。もうひとつは磁石には反応しません(写真234)。



写真234

④もうひとつのタネは、ツタンカーメンのお面の前扉(蓋)です。この裏には指輪を固定するための溝が切っており、磁石が埋め込んであります。したがって、この部分に鉄が仕込まれたほうの六角形の指輪をくっつけておきます(写真235)。もちろん、この裏面を観客に見せることはありま

せん。



写真235

- ⑤箱の床に置いた指輪は、箱の背後からのレバーの操作によって、床の下に隠すようになっています(写真236)。このために、マジシャンは、杖を挿入したあと、まず、杖が動かないように小さなゴムで固定して、床に置いた指輪が左右に動く音を確認すると言って、箱を一旦手で取り上げて左右に揺すってみせるのです。このとき、背後のレバーを操作して床に置いた指輪を床の下に落とします。箱を左右に揺すれば、床の下に落ちた指輪が左右に動いて、あたかも床の上で移動しているような音に聞こえます。この、一旦マジシャンが箱を手で取り上げる部分は、[現象]の記述では敢えて割愛してありました。

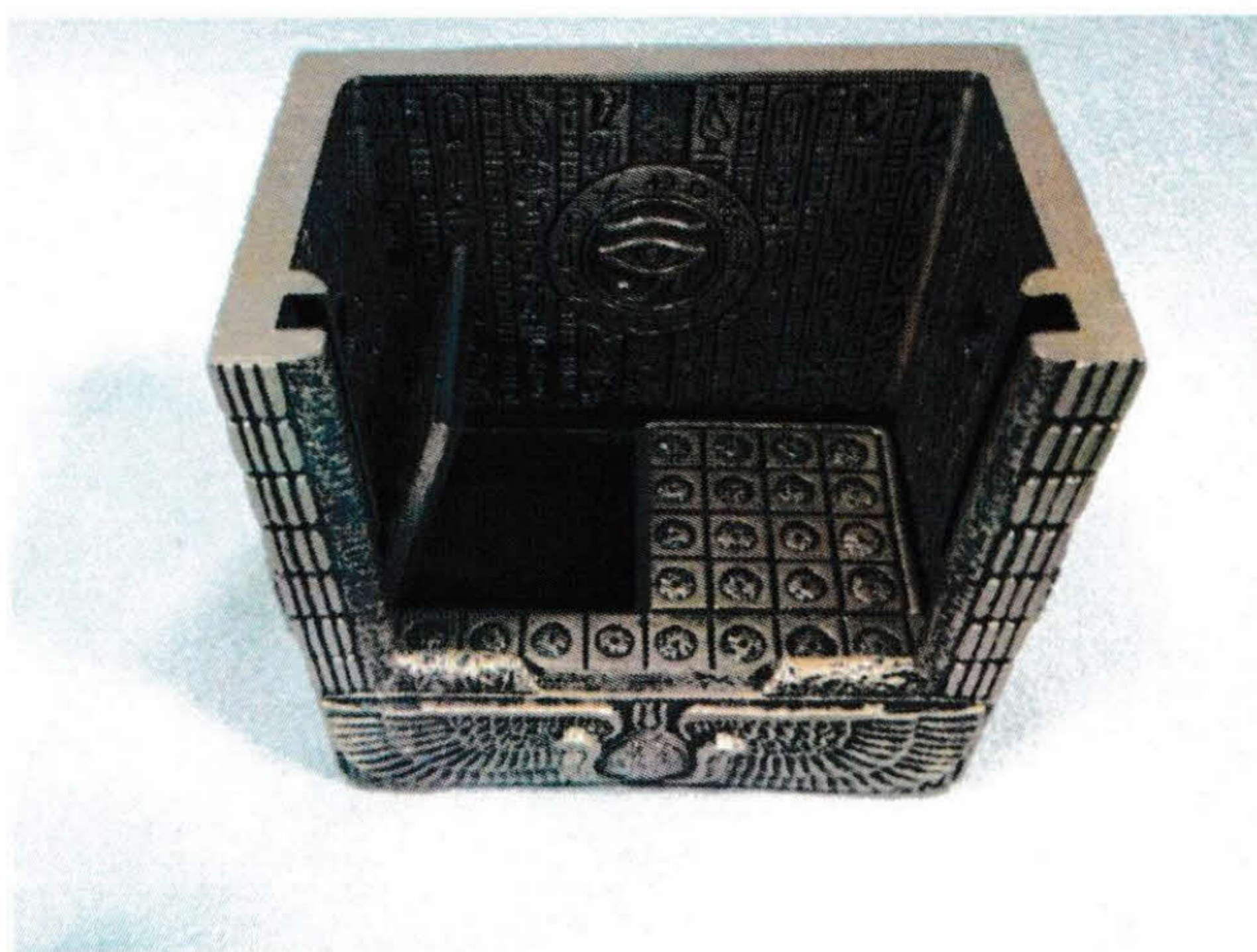


写真236

- ⑥以上で「仕掛け」の説明は終わりです。実際の演技は次のように行ないます。まず、ツタンカーメンの前扉の裏の磁石に指輪をつけて扉(蓋)は閉じておきます。杖ともうひとつの指輪を箱のそばに準備しておきます。
- ⑦この手品は、クローズ・アップで演じるものですが、箱を置く台は必要ですし、観客の目と鼻の先で演じるというよりは、少し離れたところから見てもらう演出のほうが適しています。最初にツタンカーメンなどのエジプトの歴史やカップ・エンド・ボールなどの手品が一種の魔法としてエジプ

トの時代から演じられていたことを説明し、魔法の指輪を紹介します。観客に改めてもらってもかまいません。杖も仕掛けがないので改めてもらってもいいのですが、指輪や杖を改めさせて、箱を改めさせないのはいかにも変ですので、用具の改めにあまり拘泥する必要はないと思います。

- ⑧ツタンカーメンの扉を上挙げて、箱の中が空っぽであることを見せます。ことさら、空ですなどと言うことはありません。扉の裏にはもうひとつの指輪がくっついていていますので、くれぐれも扉の裏を見せないように注意します。指輪を横向きに箱の中に置きます。客にも位置関係を確認できたら、扉を元通りに閉めます。この状態を上から見たのが写真237です。



写真237

- ⑨杖を取り上げて示し、これを右側の穴から箱の中に挿入しますが、このとき、杖が扉の裏側に磁石でくっついていて指輪を貫通するように入れます。マジシャンは上から見ることで、これは十分に可能です(写真238)。

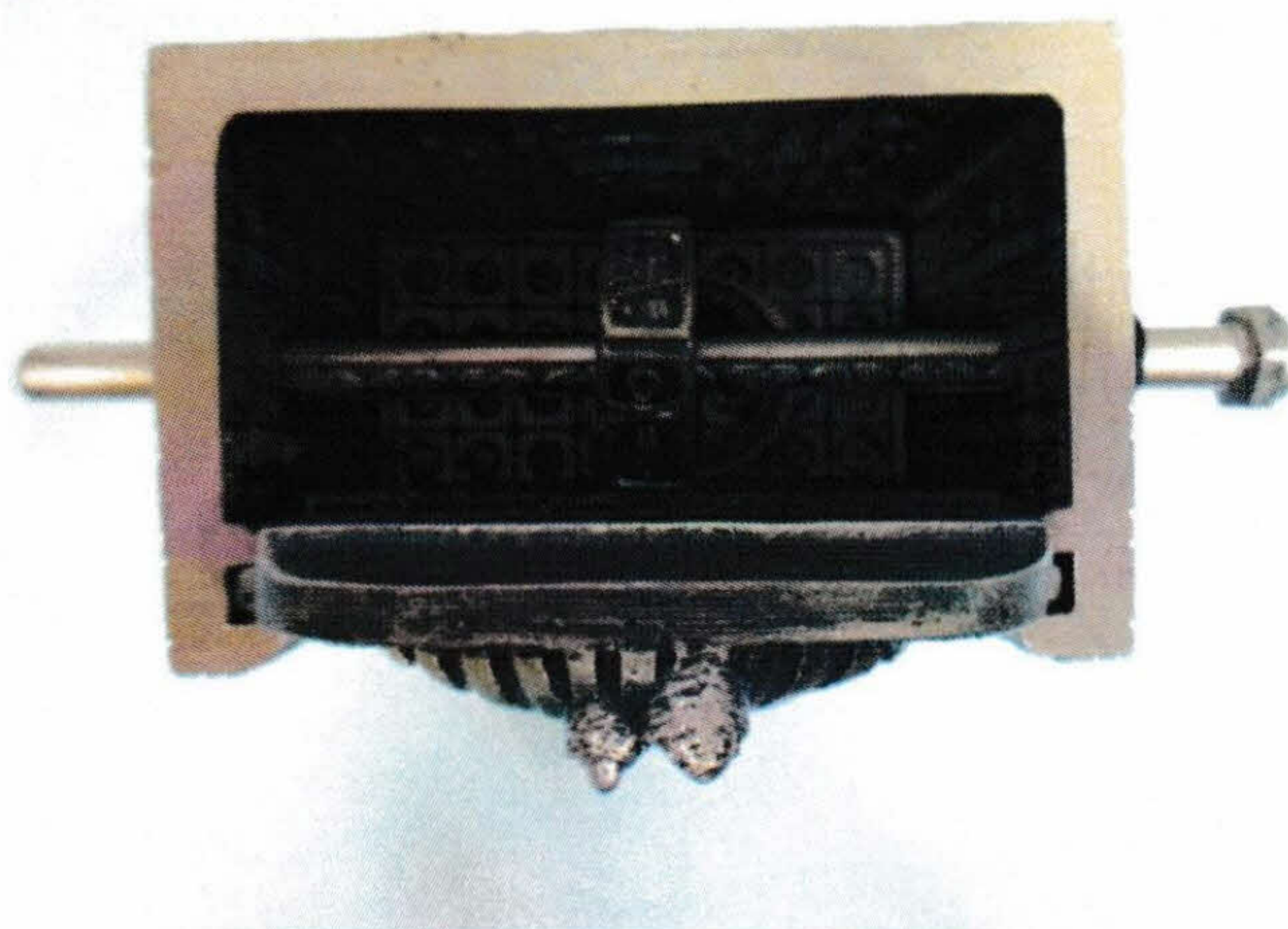


写真238

- ⑩杖を箱の反対側に突き出るまで通したら、抜けないように、外から小さな輪ゴム(写真では黒い輪ゴム)で固定します。この状態で、箱を右手で持ち上げます。そして、箱を左右に揺らして、あたかも床の上の指輪が左右に滑って音を出しているかのように示します。同時に、右手の指先

でレバーを操作して、床の上にあった指輪を床下へ落とします (写真239)。



写真239

- ⑪箱をテーブルの上に戻します。もし、演出で何か物語を使っていたのなら、そのことを説明しながら「中の指輪がどうなっているかご覧ください」と言って、ツタンカーメンの扉を上へ開けます。指輪は、杖に貫通してぶら下がっていますので、観客は驚きます(写真240)。

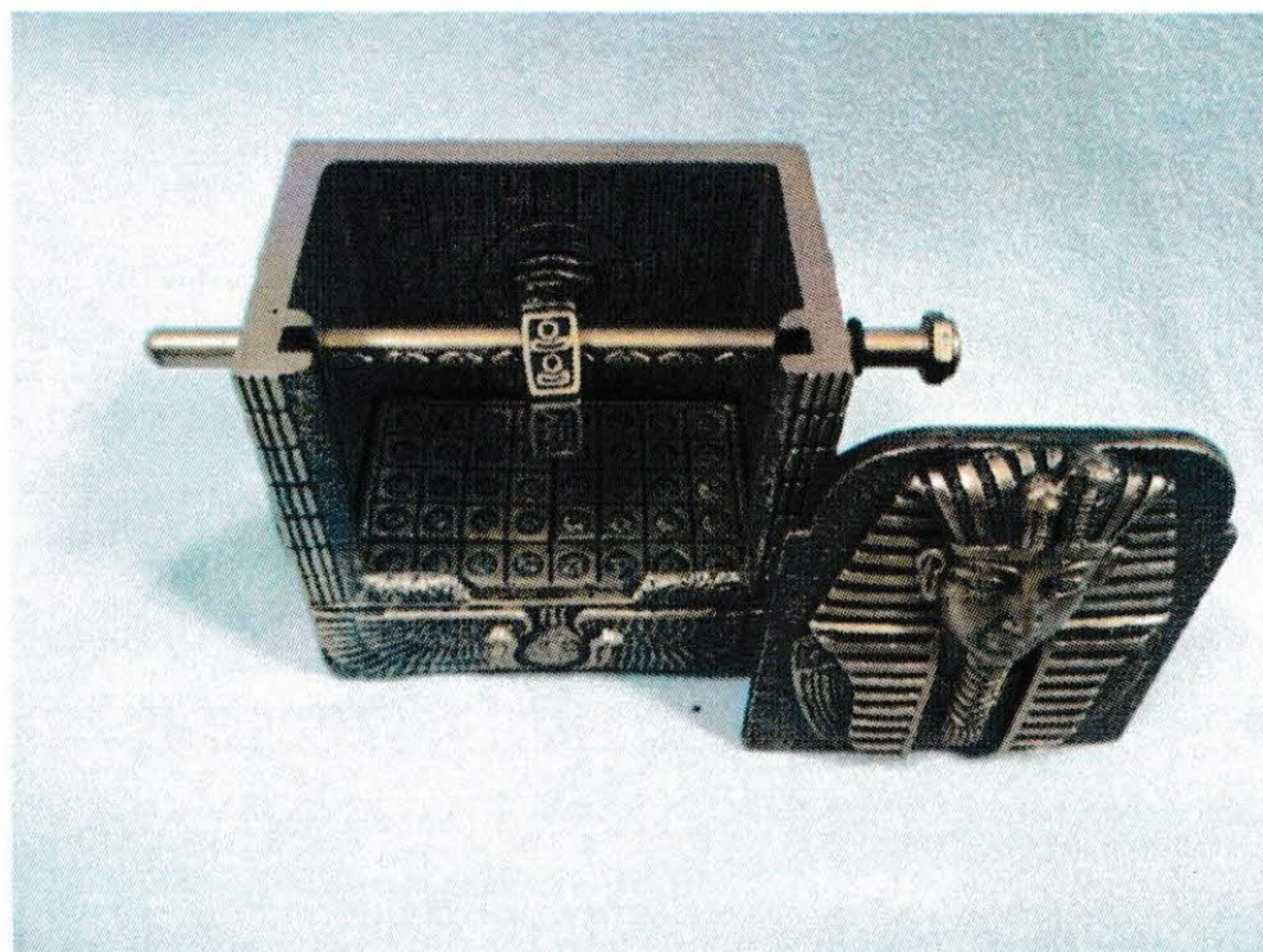


写真240

[コメント]

Magic Wagon から販売されたときのタイトルは、“Khamun Ring Mystery”というものです。Khamun は、ツタンカーメンのことだと思います。英語では Tutankhamun と綴りますが、厳密な表記では、Tut-snkh-amen と綴るので、Khamun としたのは理由がわかりません。まあ、手品用具の名前ですので、そこまで厳密になることはないと思います。2019年にツタンカーメンの墓にあったミステリー・ボックスが初めて開けられたというニュースが流れていましたので、それにヒントを得て、「ツタンカーメンの指輪の謎」というタイトルにしたものだと思います。しかしながら、この用具に付いてくる説明書には、その類の説明や演出の記述は一切ありません。そこで、強いて創作すれば、「ツタンカーメンの墓の中から発見された埋葬品の六角形の指輪には、不思議な力があるので、今日はそれをお見せしよう」という演出でしょうか。

閑話休題

新型コロナ・ウイルス感染症のおかげでというか、そのせいでというか、国外も国内も手品の大会やイベントが軒並み延期や中止になりました。私の例で言えば、毎年8月に行っていたラスベガスの会が一年延期になりましたし、2021年モントリオールで開かれる予定だった FISM は2022年7月になりました。また国内でも、毎年9月に開催されていたテンヨー・マジック・フェスティバルが中止になりました。そのほかにも、延期になったり中止になったりした手品のイベントはたくさんあると思います。ラスベガスの会の主催者に訊いたら、自分たちは開催してもいいと思ったのだけど、会場を提供するホテル側が同意してくれないということでした。確かに、ホテルとしては、大勢が参加する会を受け入れるのは消極的にならざるを得ません。

その代わり、SAM などでは、いろんなマジシャンのレクチャーをインターネットで配信してくれるようになりました。先日も、Max Maven のレクチャーを LIVE で配信してくれて、これは、zoom での配信ですから、テレワークと同じように、リアルタイムで質問もできて、なかなか有用だと思いました。このときの演題は、「マジック・クラブの歴史」で、Max Maven は、こういうことに造詣が深いので、私の知らないこともたくさんあり、非常に有意義でした。たとえば、産業革命以前は労働時間が長くて余暇の時間がなく、いわゆるアマチュア・マジシャンがほとんどいなかった、という観点は面白いと思いました。産業革命は、教科書的には1760年から1840年にかけてとされていますから、このころに世界で初めての奇術雑誌“Conjuror's Magazine”(Houdini の出したやつではありません！)が1791年にロンドンで創刊されたというのも興味深いです。ただし、この奇術雑誌は、Max Maven の説明によれば、奇術以外の占星術の分野なども扱っていて、いわゆる専門誌ではなかったとのこと。そう言えば、Professor Hoffmann の“Modern Magic”がロンドンで刊行されたのは、それから85年後の1876年で、最初の2000部が6週間で売り切れたと言われていますから、そのころにはすでにアマチュア・マジシャンは大勢いたことを伺わせます。

もっとも、この SAM のオンライン・レクチャーで、Max Maven のメンタル・マジックなどの手品の解説を期待した人はがっかりしたかもしれません。私の問題は、アメリカ合衆国と時差があることで、この映像を日本でいながらにして LIVE で観るには早起きしなくてはなりません。しかも私は、アメリカがサマータイムであることを計算してなくて、ちょっと遅刻しました。それでも1時間以上は観たと思います。

以上のことから、新型コロナ・ウイルス感染症の蔓延は、手品に関しては、必ずしも悪いことばかりではない、ということを紹介しました。

これは、masquerade part 8 の No.7 です。

e-mail のアドレス: masqpart4@aol.com

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

(2020年9月)